改教時報

第百七號

明治三十一年十二月廿六日逓信省第三種郵便物認可
明治三十六年十二月八日發行　（每月一回八日發行）

政教時報第百七號目次

論說

◎信仰論　《社說》　小河滋次郎
◎未成年者に對する犯罪豫防の手段

社會

◎基督教主義勞働組合　池山榮吉

信界

◎己を忘るるにあり　百目木劍虹

雜錄

◎錫蘭佛跡　松本文三郎
◎錫蘭島の由來　藤井宣正
◎釋智儼　中尾敎嚴
◎隨事遷　天都城

文苑

◎雜咏　句佛
◎冬の句　吟二、麻郷、素水、虚靜、曉村
◎塔影微吟　雲低里人
◎夢の吾　しげる
◎涙の慰籍　瓠樽
◎海濱の秋夜　同人
◎讀星巖詩集　無絃
◎丹楓樂　天津、白林

▲新刊紹介▼

報道

◎報道一束　《政教子》
◎山村水郷　劍虹生
◎匈牙利より　文學士　藤岡勝二

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を堅固にし國家の隆盛を企圖する事。
三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の悪弊を改善せしむる事。
五、公認教制度を調査する事。
六、社會問題を講究して、慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。
七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
九、教會の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
十一、殖民傳道を奬勵する事。
十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光發せしむる筈を講する事。

政教時報　第百七號　十二月八日發行

信仰論

上

吾人は何ぞや　佛陀は何ぞや

『一年有半』や、『天人論』が十數版を重ね、都鄙到る所に之を繙く人が多きを見れば、現時思想界の潮流を察することが出來る。吾人は之を見て、且つ喜び、且つ悲むものである。之を喜ぶ所以の者は、苟且にも世人が此の如き精神上に關したる問題に注目し、向上の途を辿らむとする傾向を卜するに足るからである。之を悲む所以の者は、此兩書の內容恐くは時代精神を代表する者であろう。若し然りとすれば、國民の內的自覺は猶程遠きものと言はなければならぬからである。吾人は先づ此等の書に現はれたる思想を以て、社會の多數を代表する聲と見做して、信仰論の端緒を開かふと思ふ。

今日青年の人が先づ宗教に向て指を染めむとする時、普通に劈頭、提起し來る問題は、靈魂は果して存在するものなりや否や、佛陀とは如何なるものなるか、と云へる如く質問である。理窟から言へは如何にも宗教に入るに當つての先決問題の如く思はれる。併し實際上、信仰の問題として全然無意味の講究である。『一年有半』が、無神無靈魂であると云へる、宣告を與へて呉れたとて、之を讀みたる人が、果して吾人は死せば虛無に歸するものと大覺悟して平然たることを得るか。『天人論』が如何にも直截簡明なる筆を以て、宇宙の本體、靈魂の不滅を說明して呉れたとて、果して著者の想像せらるゝ如く、煩悶せる青年藤村操が、一讀の下に自殺を思ひ止るまで、安慰を得しや否や、頗る疑はしい。吾人は幾多の經驗の結果、決して效力のなかつたことを確信する次第である。

トルストイの人生論に於て、上に擧くるが如き態度を以て宗教を求めむとする人を喩へて下の如く云ふてある。「人ありて祖先已來水車を以て粉を磨く職業を執りしが。一日其水車の構造につきて考へ、各部を檢し、最後に水の來る河を研究し始めた。之と同時に其家業を廢し、水車の運轉を止め、色々と講究の結果、河は即水車也との結論を得た。かく水車の目的たる所の粉を製造することを忘れて、徒らに無用の冷かなる戲論を弄しても、何等の得る所もなかつた。今世の宗教に對する議論は皆此愚をなすものである。若し人生の眞面

目を知らむと欲せば、苦痛、快樂、仰望等吾人の意識する事實を外にして、之を求むることは出來ぬ」と論じてある。流石はトルストイである。是實に宗教の眞髓に向て、直到したる實驗の叫である。

此の如く論ずれば、トルストイの思想は頗る斬新の如く考へらるゝも、佛教の眞意義は實に此に存して居る。トルストイよりも猶一層適切なる佛陀の教訓が箭喩經である。曰く、佛弟子に尊者摩羅鳩摩羅なるものありて、獨り靜處に在りて下の如き念を生じた。抑々、世尊は邪見を棄てよ、邪見を除けと云はるゝが、併積極的に此の如しと教へられぬ。全体、世間は常であるか、無常であるか。又世間は邊があるか、邊がなきか、又生命は即ち此身體であるか、又身體と異るか。隨て、人死せば命は終るものなるか、命は終無きものなるか等の事を考へた。是實に上に擧げたる『一年有半』及び『天人論』等に提出されたる問題にして、世間は唯、物質の集合に過ぎないか。實在があるか、又有限であるか、無限であるか、又人間は單に生理的身體に過ぎないか、又靈魂とも云ふべきものが存在して居るか。隨て吾々が死したるときは、生命は繼續するか、絶無に歸するかと云ふ問題である。そこで、若し世尊が、世に實在がある、無限である、靈魂がある、と云ふならば、我は清淨の行を爲すべし。若し世尊が積極的に世間は常なりと論ぜられないときは、論が立たない。隨て修行すべき根據がないと考へ、佛の所に往きて明答を求めた。其時世尊は之に對して云はるには、汝愚痴の人、此の如きことを論じつゝある間に、命の終ることを知らぬ愚かさよとて深く戒め。譬へは人ありて毒箭に當りたるが如くである。彼の親屬が之を慈愍して、安穩ならしめむために、毒箭を除く人を求むるに。彼人の念ふには、箭を除く前に、先つ我を射たる人の姓名、容貌、人性、方角を知らなければならぬ。又之を除く前に、其弓は如何なる木を以て作れるか、如何なる筋を用ゐたるか。矢は如何なる竹か、木か。其羽は如何なる鳥の羽歟。其鏃の金は何歟。之を作りたる人は如何なるかを知らなければならぬと主張する樣なものである。かくの如くなしつゝある間に、當りたる箭の爲めに命終るてあらふ。今汝が世間は有限か、無限か、靈魂はあるかなきかを論じつゝある間に、命が終るべし。看よ、世間實に生あり、老あり、病あり、死あり、憂戚啼哭して樂まざるあり、是眼前の事實ではないか。而して此の如きは大苦陰の原因を窮めて、之を滅すために、清淨の道を行ふことが、眞實の解脱の道であると教へ玉ひた。實に佛教の根本は此處に存して居ると云はねばならぬ。

此に至りて、『吾人は何ぞや』と云へる問題は明瞭に解決された。即ち吾人の靈魂は存在するや否やと云へる如き、冷かなる理論によるのではない。唯吾人は生老病死、憂悲苦惱の

實境に居るものなることを自覺することである。是が宗教に入るの門戸である。而して其根本的の摸範が釋尊に於て示された次第である。

釋尊は人生に於ける、宗教の眞髓を自覺されたる淵源である。世人は常に聞き慣れて居る爲めに、却て其生ける光輝を感せぬものがある。釋尊がカピラヴスツの城門を出で、老人の憔悴せるを見、病人の苦惱せるを見、死人の墓なき有樣を目擊し。深宮の間に俗的華麗を以て包まれつゝあつた、太子の胸を如何に刺戟したかは、吾人か想像も及ばぬ程であつた、太子が王宮を出てくれたは決して計畫的ではない。半夜沈思止むべからざるものがあつたのである。實に三界は皆苦也とは、實感の叫である。生老病死、憂悲苦惱は現實的の事實である。而して此三界の苦を如何にして滅すべきかとは太子が實驗せむとする要點である。生老病死、憂悲苦惱は如何にして解脱すべきかとは、太子胸中の宿題となつたのである。所謂生死問題なるもの、言を換ゆれば、人間の苦痛懊惱を解脱する人生問題が、抑々釋尊の宗教の源である。

思ふに印度はウダ時代已後、ウパニシャッドの哲學的講究が起り。引續きて後世の所謂六派哲學なるものが相競ふて起りたるものである。若し宇宙論や、靈魂論ならば、如何なる說も皆備りて居つたのである。マクス、ミューラー氏が當時印度に在ては、歐洲の近世哲學の端與が既に研究されてあつて、デカルト、ロックも見出すべく、カント、ヘーゲルも敍すべしと言ふたは尤てある。ニャヤ派の如き論理學を究明して、解剖的に研究するものあり。勝論派の如き、世界は極微細なる分子と其間に行はるゝ隱力の二元を以て成立すとし。數論派の如きは、自性と神我なる物心二元を以て說明せんとし。吠檀多派の如き、純然たる汎神論あり。瑜珈派の如き個人精神、宇宙精神の融合を說き。ジャイミニ派の如き、ウダの教權を主張するものもあつた。此の如き間に釋尊は生れたまひたものである。若し哲學的論議で安心が出來るものならば、釋尊は此等に滿足を見出し得べき筈である。而して夫が毫も結果のないことは、太子が數論派のアラーラ及び、ウドラーマプトラに遇ひて道を求めて、遂に滿足を見出し得なかつたことで明瞭である。彼等は頻りに原理的に安心を說きたが、釋尊は我は病者の醫藥を求むるが如し、此の如き戲論を聞くを好まずと云ふて去られた。

太子六年の實驗は毫も哲學議論ではない。降魔成道は內的實驗の極所である。ジャータカに詳かに惡魔の襲來がよく描かれてある。是所謂八萬四千の煩惱なるものである。暴風起り、驟雨來り、石飛び、劍降り、烈火天に漲り、黑灰空に滿ち、沙石泥土燻り燃え。最後に至りて四方より黑闇襲ひ來りて、太子を包み去らむとした。是れ無明なるものである。然るに愈々太子に近くに及びて悉く消滅されて、殆ど太陽の近

きつゝあるが如く、佛は光明を放ちて照さぬ隈なきに至つた日西山に入りて、太子は遂に年來の宿題たりし生死病死、憂悲苦惱の根本は、無明なる內心の闇黑に原因することを自覺された。即ち此無明あるが爲めに、誤れる行爲を起し、意識を生じ、六官を生じ、認識を生じ、感覺を起し、執着を起し乃至生老病死、憂悲苦惱の人生を生し來るのであると解決された。即ち十二因緣の順觀である。故に此無明を滅すれば、遂に人生の苦痛を脫却し得る次第である。即十二因緣の逆觀である。而して此事は恰も降魔に於て實驗された境界であつたのである。此の如く初夜、中夜、後夜觀じ去り、觀じ來りて五更明星輝くの時、內心一點の幻影を止めず、天眞廓朗、明月の淸らかなるに至られたのが、釋尊の成道である。覺者となられたのである。是が即ち佛陀である

此に至りて『佛陀は何ぞや』と云へる問題は解決された。佛陀の存在は如何にして證明すべきか抔と云ふ如き哲學的問題ではない。世の宗敎を求むるものが、靈魂の存否に向て問を放つと同樣に、又佛陀の存否に向て講究せんとするものが多い。蓋し、基督敎の如きは靈魂の實在と共に神の實在を根據とし。又印度婆羅門諸派の如きも我の存在を認むると共に、梵神の存在を認むるものである。されど佛敎の佛陀は基督敎婆羅門敎の神の如き、世界の主宰、萬物の造化、宇宙の本體などと稱せらるべき性質のものでない。若し此の如きものならば恰も、靈魂實在論と同樣に、たとひ存在すると證明された所で、單に冷かなる理窟に過ぎない。佛陀は此の如き原理的のものではない。今述べし如く、人生問題を解決し終りて、絕對光明の域に達せられたる妙境界である。之を要するに、吾人か生老病死、憂悲苦惱の人生たることを自覺するのが、宗敎の出立點であつて。其苦痛の根本たる無明を脫却したる覺體が佛陀である。

猶ほ一歩を進めて論ずべきは、其の佛陀の境界なるものは如何なるものであるかと云ふことである。一切の經文は此の佛陀の境界を描き出したるものである。大乘經典は皆佛陀に關する信仰の結晶である。華嚴經の如きは其の佛陀の力が宇宙に遍滿するの大なるより、一微塵の芥子の中にも行き渡ることを說きたるもので、實に佛陀の大悟海中の廣大なることを開顯せられたるものである。善財童子が切實に道を求め先づ文殊の智惠の導きによりて、一たび信仰を生じたる已後百折不撓向上の一路を辿りて、五十三の知識に遇ひ、慘憺たる徑路を經て最後に普賢行願の力によりて、佛道に入ることを得たことを說てある。法華經の如きは、如何なる衆生と雖、皆佛道に入らしめむとする佛陀の慈悲救濟を說きたるものである。即ち柱朽ち、梁斜に妖怪跳梁しつゝある大宅に忽然として火起り、其中に群童か戲れつゝあるが人生の有樣である。而して佛陀の大悲は大白牛車を以て一切平等に救ひ

出さむと勉めらるゝ次第である。涅槃經に於ては佛將に入滅せむとするに臨みて、弟子に告げ玉ふには、今色身は滅すと雖、如來は常住にして、變易あることなしと說き玉ひて。一切の衆生には皆佛性あり。若し人々大信心を以て此佛性を開顯せば、皆如來と同體となるべしと說き玉ひたるものである。之を要するに、何れの經文も此無限の佛陀を說きたるものである。而して華嚴の事事無碍の如き、法華の諸法實相の如き、涅槃經の佛性常住の如き、其佛陀の境界を顯はしたるもので、決して冷かなる哲理、若くは宇宙論ではないのである。而して其佛陀の慈悲救濟の願力を說き顯はしたるものが、大無量壽經に開說せられたる阿彌陀佛である。此に至りて無限の光明と無限の生命を有せらるゝ、吾人救濟の覺体を認むることを得るのである。

下　罪惡を自覺せよ　慈悲に融化せよ

吾人の何たるや、佛陀の何たるやは既に之を知りたるが、次に講ずべきは、此の如き吾人が如何にして、此の如き佛陀に接すべきかと云へる問題である。即ち信仰の中心問題である。

信仰は內心の偉大なる一大事實にして、殊に實驗したるものにあらざれば、之を知ることは困難である。今其大体の經過を略して述ぶるは、自己の罪惡を自覺すると同時に、佛陀の慈悲に融化することである。吾人が人生を自覺する時に著しく顯はれ來るものは、無常觀と罪惡觀である。殊に吾人が其力の小なるを感じ、煩惱の塊たることを自覺する罪惡觀がなければ、とても眞實の信仰を得られぬ。否是が信仰を得るの條件ではない、寧ろ古來信仰の一方面として居るのである。此の如く自己の罪惡を感すると共に、佛陀の哀々たる慈悲に接觸して其淸懷に攝取せられ、融化せらるゝに到らねばならぬ。此に至りて眞實の信仰が成立して、永久の救濟を蒙るのである。

全体信仰の事たる、內心に於ける經驗の事實である。故に實際上に於て之を經驗したる人の事實につきて叙述するが最も適切である。信仰家の告白若くは懺悔の如きものを味ふがよい。然るに其適例とも云ふべきものが少い。涅槃經梵行品に說きてある阿闍世が、佛陀の救濟を蒙りた事實が如何にも剴切であると感じたから其梗概を此に描きてみよう。

阿闍世王が、惡友提婆達多の敎唆によりて、父王頻婆沙羅王を獄に投じ。其足を刪りて遂に死に到らしめた事實は、世人の能く知れる所である。然るに阿闍世王は其後、忽ち後悔を生して、爲めに烈しき熱を生し、瓔珞を脫し、伎樂にも出御せず、心悔熱を生ずるが爲めに遍體に瘡を生ずるに至りた是れ精神の惱より身體の惱を引起したものである。然るに其

瘡臭穢にして近くべからざるに至りた。乃ち自ら念言すらく。我今此華報を受けた、地獄の果報も遠からずして到らむとすと考へ、煩悶苦痛に堪へぬ。母韋提希夫人種々の藥を以て之に塗るも、瘡は漸々増すのみにして少しも癒ゆることがない。即ち王、母に白して曰く。是の如き病は心より生するものにして、身體より來りたるものにあらず。決して人間の力で治療すること出來ぬものであると。かくて日夜身心の大苦惱に沈んだ。そこで六人の臣が六人の師匠を紹介推薦した。而して六師の說が何れも理論を以て慰藉を與へんと試みたが、何等の功力もなかつた。是『一年有半』や『天人論』か靈魂論を說くと同樣であつて。前に記した六派哲學が宗教的安心を與ふることが出來ぬ實例である。現代に行はるゝ信仰論の多くが此傾向を有して居る故、警告として一々擧げて見よう。

大臣あり、月稱と曰ふ。往きて王の所に至り、白して言く大王何故ぞ愁悴して顏容悅ばざる。身痛むとせむや、心痛むとせんや。王臣に答へて曰く。我今、身も心も豈痛まざるを得むや。我父辜なきに橫に逆害を加へた。我曾て智者の說くのを聞きた。世に五人ありて地獄を脫れず、即ち是れ五逆罪なりと。我既に無量無邊の長時間の罪を得た、如何ぞ身心痛まざることを得べき、良醫の之を治するものなしと。乃ち臣答へて曰く。大王大に愁苦すること勿れと諫め、且つ偈を說きて曰く、若し常に愁苦せは、愁遂に增長す、人の眠を喜ふが如し。眠れは眠益々滋し、婬を貪り酒を嗜むも、亦復是の如しと。是迄は他の五人の臣も皆同樣に反覆したる言である。是世の苦悶者に向て屢々人の試むる諫言である。即ち愁ふれは益々愁を增すが故に愁ふる勿れと云ふ文句である。勿論愁へずして止み得るものならば、誰も愁ふるものはないけれども愁へすには居られぬ故に愁ふものである。之を察せぬは既に實感を缺きたる言である。且つ進みて曰く。世人が地獄を免れずと言ふとも、誰か往きて之を見來りて王に語るや。今大醫あり富蘭那(Purna Kasyapa)と名く。一切智見に於て自在を得、淸淨梵行を修して、無上涅槃の道を演ぶと。蓋し此人の說は一切萬物其体空にして一個の有も存するものなしと說く。故に曰く。世に黑業なるものなき故黑業の報なく。白業なき故白業の報なし。其他上業下業等の區別あることなき故、又其報もあることなし。故に父王を弑たしるも罪は無しと云ふ。今是師王舍城中に在り、駕を屆して彼に往きて師が身心を療治せしめよと。王曰く。審かに能く、此の如く我罪を滅除して吳れるならば歸依すべしと云ひた。されど煩悶は理論を以て解くことが出來なかつた。

復一臣あり。藏德と云ふた。同じく王の愁を慰め、且つ曰く、抑々法に二種あり、一は出家の法、一は王法である。出家の法で云へば蚊蟻を殺すも罪あるべし。されど王法に於て

は父を殺すとも罪あることなし。何んとなれば王位を得るには之を殺さなければ得られぬ故である。迦羅蟲が母の胎を破らなければ生るゝことの出來ないも同樣である。今大師あり、末伽梨拘舍離子(Maskari-Gosali)と名けた。此人は衆生一切の苦樂は原因ありて生ずと考ふるは誤にして、皆自然であると考へて居る。故に曰く人間の身體は地水火風苦樂壽命の七種は常住なもので、毀つことも出來ず、作ることも出來ず、之に利刀を投ずるも害すること出來ぬものである。故に罪がないと慰めた。されど王の苦悶を解くに足らなんだ。

復次に臣あり。實得と名く。曰く。世に非法を無法と名け惡子あるを無子と云ひ、鹽少きを無鹽と名くるが如きもので。前王罪無しと云ふと雖、猶餘業ありて招きたるものなれば、彼過去の餘業の爲めに其結果を得たるもの大王には何の罪もない。今大師あり。刪闍耶毗羅胝子(Sanjayivariadi)なる人ありて說きて曰く。一切の衆生は隨意に善惡の業を作るも罪あることなし。火の淨不淨となく、物を燒くが如く、地の淨穢となく、普く載するが如く。乃至水風等の如く、秋になれは樹が髡となるも、春になれば再び生するが如く、人間か命終れば又人間に生るゝまでのことである。故に苦樂の果報は、現在の業によらず、現去の業によりて自然に來るまでのことである。夫故に王には罪なしと慰めた。されど王の苦悶を解くに足らなんだ。

復次に臣あり。悉知義と名く。彼は父を殺せる王の例を擧げて曰く。すべて因緣によりて生ずるにあらず、因緣によりて死するにあらず、因緣にあらずは善惡あることなし、今大師あり。阿耆多翅舍欽婆羅(Agitakesukambala)と名けた。一切平等を主張した。刀を以て右の脇を斫るも、左に栴檀の香を塗るも、二人の心同樣にして差別なく、怨親の心がない。故に自ら人を殺すも、刀を以て一切衆生を輪殺するも、若くは一村一城一國の人を殺し、他をして殺さしむるも、若くは一村一城恒河已北の衆生を殺し、恒河已南の衆生に布施するも、罪福なるものは少しもないと說いた。されど王の苦悶を慰むるに足らなんだ。

復次に臣あり。吉德と名けた。曰く。抑々地獄とは何であるか、是智者が文辭上に於て作りたるものに過ぎない。地獄とは如何なる意味か、地は地、獄は破、即地獄を破るも罪なしとのことである。又地は人、獄は天、其父を害して人天に到ると云ふことである。又地は命、獄は長、生を殺すが爲めに長壽を得ると云ふことである。麥を種ゆれは麥を得、稻を種ゆれは稻を得、地獄を殺せば地獄を得、人を殺せば又人となることを得べし。故に殺害を行ふとも罪あることなし。若し「我」があるものならば「我」は常住にして變易なき故、破れず、壞れず、虛空の如きもので、殺せぬものである。若し「我」がないとすれは、無常にして念々に滅するものなれは、之を

殺すこと出來ぬものてある。火の木を燒くに、火、罪なく、斧、樹を斫るに、斧、罪なきが如くてある。今大師あり。迦羅鳩駄迦旃陀(Kara kudaKatyāyana)と名く。說て曰く。人を殺して心に慚愧の心を生せば、地獄に生じ、慚愧の心なければ惡に墮せず。大地は水の爲めに浸さるゝも、虛空は浸さるゝことのなき樣なものてある。一切衆生は自在天の作る所にして、恰も大工か家を造るも同樣てある。皆神の意志なれば人には何の罪も福もないと說いた。されと王の苦悶を慰むるに足らなんだ。

復次に臣あり。無所畏と名けた。曰く。壽命は風てある。風氣は殺すべからず。如何にして罪あるべき、世に良醫あり。尼乾陀若子(Nirgranth-Gnāti)と云ふ。世に施なく、善なく、父なく、母なし、修もなく、道もなし、八萬刼を經れば、自然に解脫すべしと說きた。然れども王の苦悶を慰むるに足らなんだ。

最後に大醫あり。耆婆と名けた。王の所に往きて問ふて曰く。王、安穩に眠るを得べきかと。王は大に罪を懺悔して曰く。我病は藥を以て治すべきものてない。我父法王法の如く國を治め實に罪かなかつた。我之を苦むること魚を陸に處するが如くした。我將に地獄に墮せんとす、何ぞ安穩に眠ることを得べき、と。實に阿闍世は極端の罪惡觀に伴ふに無常觀を以てした。此時耆婆の答は全く他の六人の冷かなる慰とは趣を異にしてゐる。曰く。善き哉、善き哉。王罪を作れりと雖、心に重悔を生して、慚愧を懷けり。大王、諸佛世尊常に此言を說き玉ふ。二の白法あり、能く衆生を救ふ。一は慚二には愧てある。慚は自ら罪を作らず、愧は人をして作らしめず。慚は內に自ら羞ぢ、愧は發露して人に向ふことてある。慚は人に羞ぢ、愧は天に羞つ、是を慚愧と名く。無慚愧は名けて人と爲さず、名けて畜生と爲す。慚愧ある時は父母師長を恭敬す。慚愧あるが故に父母兄弟姉妹あることを說く。善き哉、大王具さに慚愧ありと。かくて先づ王の慚愧せるに對して同情と慰籍とを與へて、進みて曰く。大王當さに知るべし、迦毗羅城の淨飯王の子、性は瞿曇氏、字は悉達多、師なくして覺悟し、自然にして無上道を得玉ひた。大慈大悲にして一切衆生を憐愍すること犢の母を逐ふが如くてある。王速かに其所に往きて敎を受くべしと勸め、親切到らざることなかつた。

此時空中聲ありて、曰く。佛は將に大涅槃山に入らむとし玉へり、阿鼻地獄の苦亦免るゝこと能はざるべし。願くば速かに佛の所に往け、佛を除きては能く救ふものあることなし。我汝を慰むが故に勸め導くなりと。王之を聞き終りて心に怖懼を懷き、身を擧げて戰慄し、五體掉動して芭蕉樹の如くてあつた。仰て答て曰く、汝は是誰ぞや、色像を現せずして但聲のみあるはと。曰く。吾は是汝の父頻婆沙羅なり、汝今耆婆の所說に隨ふべし、邪見六臣の言に隨ふことなかれと王之を聞き終りて悶絕して地に蹶れた。身の瘡は益々劇しく、冷藥を以て之に塗るも、毒熱し、瘡蒸して、少しも減ずることなかつた。實に是れ身心大苦悶の極に達した。

此時佛は月愛三昧に入り玉ひて大光明を放ち玉ひ、其光淸涼にして王の身を照し玉ひたるに、身の瘡癒へて、醫蒸消滅し、身體淸涼なるを覺へた。乃ち驚て耆婆に問ふた、耆婆答へて曰く佛此光を放ち先つ王の身を治め而して後心に及ふ。譬へば一人にして七子あらむに父母は其中病に遇へるものを憐むが如しと。實に骨身に徹する敎てある。苟も大なる病を得て爲めに道に入りたる經驗のある人は、其病の癒へたることを決して偶然と思ふべきてはない。

阿闍世は地獄に墜ちんことを恐れて、耆婆に賴みて象の上に同乘せむことを求め、遂に佛の所に往きた。其時の佛の慰藉と慈愛とは到れり盡せりてあつた。先づ二十個條の法要を說きて佛敎の要義を授け、進みて人間は五蘊集合の結果なるゆゑに、決して殺も眞の殺にあらず、深く執着すべからざる旨を說き。又、罪にも輕重の別ありと云ひて口と意とを以てするも、身を以てせざれば輕しと云ひて之を慰め。遂には本、諸佛が頻婆沙羅の供養を受けた故に、其功德て王になられたものてある。王にならなかつたならば阿闍世王が殺す筈はない。故に阿闍世王罪あらば諸佛亦實に罪あり。諸佛は實に王の罪を救はざるべからずとまて慰められた。實に佛陀の慈愛は惡人と手を握り、床を同じくして之を融合せらるゝ次第てある。猶進みて頻婆沙羅王及阿闍世王の本生を說きて、相怨むこと偶然ならざることを述べ。遂には貪狂、藥狂、呪狂、本業狂の四種の狂人は其罪を記せざることを述べ、徹頭徹尾大慰籍を與へられた。

阿闍世王遂に大安心を得、感涙に咽びと曰く。莽蘭子を生ずるを見る。未だ莽蘭子より旃檀樹を生するを見ざりき、今始めて莽蘭子より旃檀樹を生するを見たりき。莽蘭子とは我身是也。旃檀樹とは即是我心無根の信也。無根とは我初より如來を恭敬するを知らず。法僧を信ぜず、之を無根と名く。我若し如來世尊に遇ひ奉らずは、無量阿僧祇刼に於て大地獄に在りて無量の光を受けむ。今佛を見奉るを以て衆生のあらゆる一切煩惱惡心を破壞すと。遂に大安心の地に達した。

是實に生ける大信仰の告白てある。再ひ見るべからざる信仰の經驗てある。親鸞聖人が信卷に自ら慚愧の情を披瀝して曰く。かなしきかな愚禿、鸞。愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑して定聚のかずに入ることをよろこばず、眞證の證にちかつくことをたのしまず。はづべし、いたむべしと云ひて、此涅槃經の文句を引用して暗に自己の告白に代へられたるを見れば、聖人の信仰が如何に罪惡自覺の點に於て深くして且佛陀の慈愛を感ずる點に於て高かつたかを徵すべきである。蓋し信仰は此に至りて極所に達してある、聊か信仰論を作る。

未成年者に對する犯罪

豫防の手段（承前）

小河滋次郎

都會の地は人の健康に適せざるが如くに、また最も人の精神を腐壞するの魔力に富む、文運進歩人口增加に伴ふ自然の結果なりと雖も、社會政策の上より之を見れば、國家百年の基礎を壞亂するの危機は即ち此に存するを以て、成るべく人力を以て及び得らるべき程度まで、之を制限することを努めざるべからず、近年盛んに地方分業即ち工場等を新設するに當つて成るべく都會地を避けて人口稀薄の地方を撰定すべしとの說を唱ふる者あるが如きは、即ち之れが爲めなり。

中央集權は都會の發達となり、都會の發達は地方總べての力を吸集すると共に、又幾多の未成年者を此に流注せしむるの弊あるを免かれず、一たび鄕關を餠して都會に來る者、恰かも籠鳥の一朝にして放たれたるが如く、家庭なく、親族なく、また鄕黨の彼れを制裁監視する者あるに非ず、四面皆彼れを誘惑するの惡魔にあらざるはなく、忽ち都會華奢の生活に馴れ、容易に彼れの不健全なる社交的情慾を驅つて酒色の奴隸たるに至らしむ、浪費放逸の前途は犯罪に非ざれば即ち自殺に非ざれば即ち無賴の壯士是れのみ、地方健全の子弟が都會に於て墮落するの逕路は皆此くの如きなり。健全有爲の少年をして努めて其足を地方に留めしむるの策を講ずべしとは、夙に既にアダム、スミスの吾人に警戒する所なるにも拘はらず、少年の都會に流注するの弊は今尙ほ昔の如くなるのみならず、否な年を追ふて益々其弊を加ふるものあるの實況なり。經世家の看過すへからざる所なりと謂ふへく、宜しく速かに工業制度教育制度等の上より獨り地方の少年を地方に止めしむるのみならず、進んで又都會の少年をして健全なる地方に移植せしむるの策を講ずる所あるを要す、都會の富榮は人の健康と生命とを犧牲に供したる結果に外ならず、死亡比例（我國東京郡部の百に對する都會一二四英國地方の百に對する都會一一七）の證明する所にして、富榮の進むに從つて益々人の健康を毀傷し人の生命を短縮するものと謂ふべし、此くの如くにして如何ぞ能く將來の大國民たることを期待し得へけんや、少年は即ち未來の大國民を組織するの要素なり、彼れを都會に生活せしむるの結果は、徒らに唯た一都會の富榮を製造するの器械として空しく其血を絞り其骨を削らしむるに過きす、一日も早く之を健全なる地方に移すの道

を講ずること、蓋し社會政策の急務となす所なるに非すや。

人口增加は生存競爭の激甚を餘義なくし、生存競爭の激甚なるの結果は益々社會貧富の懸隔を擴大し、一方に劣敗沈淪の貧民を增加すると共に、他方もまた之れをして自暴自棄社會を敵視するの罪惡行爲に陷らしむるを免かれさるは、蓋し自然の數にして、都會繁華の地に犯罪者を出だすこと多く（人口增加を以て單純なる犯罪增加の原因と認むる能はさること勿論なりと雖も通例一英方里內に五百人の人口を有する地方は同範圍內に例へば二千人の人口ある地方よりも犯罪者を出すことなく又一方里內に二千人の人口を有するの地方は一万人の地方に比して遙かに其の割合の僅少なるを見るは實際の事實なり）又犯罪なるもの殆んと下層貧民社會の專有物なるかの如き觀ある所以のものは即ち之れか爲めなり明治三十四年の調査に依れは、同年間に於ける受刑者總數一七〇一八七人、此內全く資產を有せさる者合計一五二七六一人、其稍資產ありと稱する者一五、〇三〇、資產ある者に至つては僅かに二三九六人の少數に過きす、（司法省監獄局第三回監獄統計年報）各國統計表の示す所亦畧ほ其軌を同ふす、本稿を草するに當り、偶々接手する所の獨逸監獄協會雜誌第三十七卷、第三及第四號所揭のマルコウヰツヒの論に依れは坊國に於ける最近十年間の輕重罪受刑者總數は三五一一〇〇人にして、此內僅少の資產ありと認むへき者四九〇〇〇人、資產を有する者僅かに二一〇〇人、其赤貧なる者に至つては實に三〇〇〇〇〇人の多數を占むる實況なりと云ふ、貧困即ち經濟上の欠乏なる所のものか下層社會の民衆を驅つて犯罪に墮落せしむるに至る主要の原因たることは是れ以て見るも極めて明瞭なる所にして、救貧制度の一日も忽諸に付すへからさる必要ある所以を知るを得へし、英國は救貧制度の適實且つ普及を以て世界に冠たるの名譽を有するの國なり、一八九二年の調査に依れは、英國及ひウエールスに於ける被救助者の割合は、平均人口百人に對する約二人六二に該當す、然るに犯罪と貧富の關係に就て調査する所に依れは、平均數以下の被救助者を有するの地方（換言すれは貧民の割合に少かるへき地方）例へはランカスタア、チエスタア、ノルスアンベルランド、ヨーアウヰツク、ウヰツドルセツクス、ダルハム等に犯罪者—幼年犯罪者を出たすと多數にして、反つて其他の平均數以上の被救助者を有するに對し、犯罪の割合は百分の二に過きす）なるの變象事實を發見するに至れり、是れ果して變象事實として認むるを得へきものなるか、モリソン（A.O.18）は救貧制度施行の手加減に基く所の當然の現象にして、偶々以て適實なる救貧制度の普及に依つて、貧民を其欠乏より救濟するとの如何に犯罪豫防の上に著るしき效果を奏するかを證明するに足るものなりと言へり、救貧制度の事我國今日の實況に於ては不備と言はんよりも、寧ろ皆無なりと謂ふも可なり、社會的犯罪豫防の道

を講せんとならは、須らく先つ健全適當なる救貧制度を制定施行するに至らしむると焦眉の急務なりと謂ふべし。

社會經濟關係の發達か個人的生活關係の狀態を一變せしむるに至りたること、殊に又幼年犯罪者の增加を助長するの一原因なりと認めさるを得す、昔者下層勞働社會の者と雖も、夫は外に出て丶勞働し、婦は終日止つて家事を處理し、或は兒童の鞠養を主管するの傍らに僅かに其餘暇を利用して內職に從事する位のことに過きす、夫も亦昼に晩に家に食して能く婦を助けて其子を保護監督する所あり、然るに今は則ち全く其の關係を一變し、夫婦相携て終日外に勞働するも尙ほ以て其一口だに糊するの資を得るに足らず、偶々其兒を愛育せんと欲する者なきに非ずと雖も、到底力能く之れに堪ふる能はず。多くは則ち其兒を見ること唯だ足手纏ひの厄介物たるに過ぎず、終日之を孤棲に放任して而して顧ること（偶々彼れを保護する所の者ありと謂ふも、其も亦同じく放養に遺棄せらるゝ所の幼少なる兄又は姉なるに過ぎず）なく、機會あれば則ち未だ其敎育年齡に達せざる前に當つて既に之れが勞力を虐使し、若くは之を驅つて浮浪自活の群に入らしむ、而して彼れの所謂家庭なるものを見るは、僅かに九尺二間の陋屋に於て親子兄弟の共棲を見るの間は、唯だ夜中僅少の時間たるに過ぎずして、それすらも亦平和の間に共棲を見るの場合は稀有にして、多くの父は則ち勞働の歸途酒舗に泥酔して夜半を過ぐるも尙ほ家に歸らず、母も亦少女と共に市中を徘徊して多く家に在らず、彼れの耳に入り彼れの眼に映ずる所のものは、一として詈罵爭鬪醜猥怨嗟失望墮落の聲容にあらざるはなく、彼れの直接身に受くる所の者は常に唯だ飢渴と虐待との二つあるのみに過ぎず、之を要するに、彼れの家庭若くは境遇なる所のものは、總べての罪惡の魔窟たる下層貧民社會の生活狀態に外ならずして、貧民窟の光景を詳かにするを得れば、即ち彼れが如何なる關係の下に放養せられ生育せられつゝあるかを推知することを得べきなり、我が下層社會の實況を記述せるもの丶一節に曰く、「九尺二間の陋屋廣きは六疊大抵四疊の一小廊に、夫婦子供同居者を加へて五六人の人數住めり、（余曰く伊國の貧民窟は平均七〇乃至八〇立方メートルの廣さに過ぎさる陋屋は、八人乃至十人の者か共住するの實況なりと云ひ、倫敦の貧民窟は一人の占むる所平均約二三四立法メートルの廣さに該當すへしと云ふ）之を一の家庭とし言へば一の家庭に相異なけれと、僅かに四疊六疊の間に二三の家庭を含む婆あり、血氣盛りの若者あり、三十を出てたる女あり、寄留者多きは蓋し貧民窟の一現象なるへし、而して一家夫婦なりと稱する者を見るに、正式に媒介者を得て夫婦となりたるは極めて少し、實際を探れは一つの路次數十軒眞實の夫婦は二三に過きさらん、貧民に國籍なき兒童多きは蓋し野合して私生兒產れ、中途にして婦女の逃走する者

多きより生す、而して夫婦喧嘩は貧民の家庭最も多く見る所、或は生活の苦悶を夫婦喧嘩の上に示せるものなきに非されとも、亦何等の理由もなく衝突して罪なき子供にあたり、晝食の用意なきにも拘はらす仕事に出てさるもあり、內助たる女房も亦互に親切を盡して其生活の負擔を輕んすることをせすして、內職より得たる金を所天に隱し窃に飲食に費つるもあり、闇黑の方面を見來れは眞個一幅の修羅場なり云々」（横山源之助氏著「日本の下層社會」四〇頁）一幅の修羅場としては聊か筆力の足らさる所あるやの感なきに非すと雖も、兎に角九尺二間の陋屋內四疊乃至六疊の一小廊に、夫婦小供同居者を加へて五六人の人數住めりと云ふの一事を以ても、其慘たる光景の一班を推知するに足るべし、又同氏が曾つて貧民の正月を記さんが爲めに、明治廿八年一月二日鮫河橋谷町二丁目を彷徨し一人の婦女が喞てると云ふ實話を寫して曰く……あゝ世の中が厭になつちまつたと敗居に腰掛け髮も亂れて見る影もなき一個の婦女手を懷に入れ悄然として身の上を語りつゝなほ言葉を續けんとする時、「母あちやん最ふ午砲になるよ父樣はお前ぐてん〳〵に酔ッぱらつて來て母アちやん居ないつて怒つて居るよ」とバタ〳〵路次の踏板を鳴らしながら七歲位の子供は婦女の前に來りぬ「左樣かい」と顏を潍め飲み助には眞實に困つちまう」と咳き、更に此方を向きてこの餓兒か居るばかりであんな奴と夫婦になつて居るんだねと言ひ〳〵淋しく笑ひながら二足三足去りしと思へば如何にせしものぞ子供の泣き叫べる聲聞えぬ云々」人は境遇の動物なりと謂ふが如く、健全なる意識を有する一個獨立の士人と雖も、動もすれば輙ち境遇の惡感化を蒙むるの恐れなきを得ず、況んや生れながらにして常に斯かる腐敗溷濁の惡境遇に放養せらるゝ幼年者の前途に於ておや、滔々相率ひて罪惡の轉歸を取るに至るべきは蓋し自然の數にして、寧ろ其全部を擧げて盡く犯罪に陷れしめざるを得るの僥倖を怪むべきに非ずや、然らば之れに對する社會的豫防救濟の法如何と云ふに一般貧民の生活狀態を改良するの必要あること勿論なりと雖も、之れが改良を計るの前に於て先づ其乳の代はりに涕を飲み、若くは梅毒的又は酒毒的母乳に養はるゝ所の乳兒を始めとして腐敗溷濁なる境遇に放養せられ、虐使せらるゝ所の幾多の幼年者を拉し來つて、之れに適當なる保育及び敎養を加へ、其獨立自營するに足るの人格を備ふるに至るを保つて、之を放還するに至らしむるの道を講ずる所なるを要す。孤兒院、棄兒院、貧兒院等の設立を必要とする所以は即ち之が爲めなり、既に其必要を認めて之を設立する以上は成べく惠澤普及の範圍を擴張し、遺棄放養の事實の未だ現はれざるに先だつて、進んで自ら之を探求發見し來るの覺悟なかるべからず。世間貧民施療院の必要を唱ふる者あり、實際に於ても亦間々其設立せるものあるを見さるに非ず、然かも其收

容する所の者多くは即ち不治若くは頻死の病者に非ざるはなく、療養に由つて回復の見込みあるべき疾病の爲めに空しく長く苦悶する所の病者は則ち毫も其惠澤に浴する能はざるの實況なり、貧民施療院を設立する所以の旨趣果して能く是を以て貫徹し得たりと謂ふを得べきか、所謂孤兒院貧兒院等の實況に就て之を見るも、往々にして世の所謂施療院なるものと其趣を同ふするの觀なきに非ず、此の如くんば則ち寧ろ始めより之を設立せざるに如かず、英佛獨瑞西北米合衆國等到る所既に立法の實例に乏しからず、殊に佛國に於ける一八七四年發布の幼者保護法の立案に係るの如きは最も參考の價値あり、政府は宜しく此に鑑みて一日も早く幼者保護殊に孤兒貧兒の收容保護に關する適切の法律を制定し、國家自衛の目的を全ふするに至らしめんことを望む、所謂犯罪の個人的原因なる所の者は年齡、體質、性情、男女の關係を指して之を稱す、一般犯罪が男に多くして女に少きか如く、未成年犯罪者に就ても亦男女の關係に依て其間に著しき相異の事實あるを見る、是れ蓋し自然の體質性情に依ること勿論なりと雖も、然かも其間に社會的關係の勢力の大なるものあるを否認する能はず、若し女子に對しても亦男子と同一の教育を與へ且つ之を男子と同一なる地位に立たしむるものと假定せは、其犯罪者を出す割合に就ても亦甚だしき差異を見るに至らざるべきは、現に今日女子の境遇の變化と共に年々犯罪の割合を增加しつゝある現象に依つても能く之れを證明することを得べきなり、年齡性情體格等に就ては前に既に陳述する所ありたるが如く、概して營養不良體質虛弱者若くは機能の不備は殆んと幼年犯罪者の特有なりと謂ふを得べく、從つて其性情も亦普通兒童に異る所のものあるを推知するに難からざるなり、然れども是を以て果して社會的原因と相對峙して一の獨立的原因と認むべきや否やは余の大に疑なき能はざる所にして、體質の虛弱と云ひ、性情の偏僻と言ひ、其境遇より享受したるものは言ふに及ばず、假令遺傳に由つて稟有したるものと雖も、其基く所多くは即社會的關係にありと謂ふを得るの場合多きものあるを信ず、營養不良は缺乏せる生活關係に免れ能はざる自然の現象にして、酒毒病毒に沈湎し若くは己れの子弟をすら扶養する能はざる程の社會下層の低能者に普通一般に見るか如き健全なる聖き兒童を生せしめ能はざるべきは當然の理なり、若し社會關係をして適正なるを得るに至らしめば、彼も亦神使を待て永く其家に福ひするの惠に浴することを得べし、余輩固とより嚴正なる學術的意義に於て犯罪起生の原因を別つて社會的及個人的の二種となすの說を否認せんと欲する者に非すと雖も、少くも幼年問題に就ては殊に重きを社會的原因に置くの理由及ひ必要あるを信し、ケトレーノ所謂「犯罪をなす者は犯罪者其人なりと雖も、犯罪者をして犯罪するに至らしむるものは社會即ち是れなり」と

の說を全然是認して幼年保護即ち未成年犯罪者處遇問題の骨子たらしめんことを希望する者なりと、斷言するに躊躇せざるなり。（完）

基督教主義勞働組合

池山榮吉

◎前數回に於ては、獨乙勞働組合の發達といふ題で、進歩（自由）主義、及び社會主義勞働組合の沿革を述べ、併せて聊か評論を試みたが、今回は矢張り獨逸に於ける、所謂『基督教主義の勞働組合』に就てお話をすることゝまやう。

◎獨逸に於て、所謂『基督的社會運動』の結果、舊教の方でも、新教の方でも、一種社會的の勞働者團体の出來たのは三四十年前からの事であるが、這種の團体は、謂はゞ、勞働組合の階梯と見做すべきもので、（這種の團体の目的行動等に就ては後日紹介することゝしやう）眞に勞働組合の性質を具へて居るものではなかつた、宗教を標榜せる眞正の勞働組合の成立つたのは、未だ極く新らしいことなのである。

◎勞働組合の漸次發達するに從つて、勞働組合其ものゝ効用は、多數勞働者の認める所となつたが、嘗て述べた通りの次第で、既成の勞働組合といへば、多くは、或は進歩（自由）主義、或は社會主義と寅緣附合して居つたが爲め、一部の勞働者、殊に加特力教を奉じて居る勞働者は、之に加入することを屑しとしなかつたが、兎に角、從來の宗教的勞働者團体だけては、到底十分に、勞働者の地位改善を期することは出來ないから、是非とも別に、一種の勞働組合的のものを設ける必要がある、といふことは、右の團体員間に認めらるゝことゝなつた、而して之が實行方法としては、先づ團体の下に、同種職業に從事する團員より成る『專科』を附置するのが宜しい、といふ說が出て、一般の贊成する所となつた。さてこの專科なるものゝ、目的組織行動の何たるやは、ドクトルヒッツエの起草せる『綱領』に依つて、最も善く窺ひ知ることが出來る。而して該綱領は、千八百九十四年に於て舊教勞働者團体の總會、併びに新教勞働者團体の總會の承認する所となり、兩派共通の準則となつたものであるから、左に之を抄錄することゝしやう。

一　勞働者は、他の職業團体に於けるが如く、自家職業の利益を保護し、增進する爲め、團結する權利と必要とを有す。

二　現在の職業組合（勞働組合）は、殆んど全く、社會主義

及び自由主義の、影響の下にあるものなれば、基督教を奉ずる勞働者に、危害を及ぼす虞れあり。

三　此危害を除去するには、或は基督教的勞働組合を設立するか、然らずんば、基督教を奉ずる勞働者を教養して、社會主義、若くは自由主義の影響を、蒙むることなからしむる樣の、手段を施こすこと肝要なり。

四　基督教を奉ずる勞働者を、健全且つ有効なる組織の下に統一するに就て、最良且つ確實なる方法は、現在の加特力（又は新教）勞働者團体内に、專科を形成するにあり。

五　此の專科の目的は左の如し、

一　專門教育の奬勵（教授、講演、展覽會の開設、專門圖書館の設置等に依り）

二　現行の社會的法律制度に關する根本的示教、

三　現在の勞働關係に關する取調、不都合なる狀況及び其救濟方法の明示、當局に對する必要なる改善方法の申告及び要請、

四　正當なる希望及び要求を達せん爲めの、最後の手段、即、罷工の擧に出づるは、必ずしも禁ずる所にあらずと雖も、團体指導の任にあるものは、

イ　先づ、平和の終局を收むべき總べての手段を試み、

ロ　獨り勞働者の視點及び理由のみならず、與勞働者の反對理由、並びに罷工の危險をも併せて、充分に考量し、

八　受、與勞働者間には利害の反對なる點あると同時に、他面にはまた其の共通なる點あることを忘るゝことなく、

二　常に平和を以て終局の目的とするに努むべし。

六　專科は、專科自ら撰擇したる理事會之を指揮す。

七　專科の行動は、專ら物質的の職業上の利益を圖るに止まり、娯樂の集會の如きは、專科に於て之を爲さず、本屬團体の權に讓る、專科に加入することを得るものは、本屬團体員たるものに限るを例とし、然らざる場合には、本屬團体の長たるものゝ明示の承認を要す。

八　專科は、只理論を研究するのみならず、實際の方案を案出し得べき樣に勞働者を指導し、勞働者をして其の意見及び希望のある所を、理事、與勞働者、又は官、公廳の前に、穩かに陳述し、其の要求を平和の手段に依て達することを努めしめ、敢て煽動を以て事とすることなく、社會の平和を致す樣心懸くべし。

◎該の綱領の趣意に基いて、奮つて專科の制を實行したのは、主として加特力側の勞働者團体で、千八百九十五年ドルトムンドに開きたる、全國加特力教徒大會の如きも、大に之を奬勵し、その普及を勸誘した樣な次第であつたから、幾もなく、處々の加特力勞働者團体には、專科が附置されることゝなつた、が、發達の趨勢は此に止まらないで、既に專科が設定されて見ると、專科の制は、余りに地方的であつて、加之に宗派的に限局されて居るから、勞働者の利益を確保するには、餘りに範圍が狹隘過ぎて、十分の効果を奏することが出來ない、といふことが明了となつた、て、元と〳〵勞働者の利益は關聯して一体を爲して居るものであるから、その增進を計るには、成るべく多數の勞働者を網羅する組織が必要であるといふところから、初めは一團体の諸種の專科が提携して事に當る樣になり、進んでは或る都市（伯林、ミュンヘン、スツットガルト等）全体の專科が聯合する樣になり、更に進んで、同種職業の幾多の專科が聯合して、一地方の狹隘なる範圍を踰えて、一組合、即、所謂勞働組合を組成するに至り、最後に、一層廣汎なる地盤を作らんが爲めに、宗派の異同に拘泥することを止め、單に基督教といふ旗幟の下に、新舊兩教派の勞働者を、打て一團とせんとする組織、即、所謂『基督教主義勞働組合』なるものゝ發現するに至つた。千八百九十四年、エッセンに組織された鑛夫勞働組合は、右の意義に於ける基督教主義勞働組合の最始のもので、それからして、其他の職業に從事するものゝ間にも、續々同樣な組織が出來て、既に千八百九十九年には、全國基督教主義勞働組合大會が開かれる樣な形勢に立至つた。

◎千八百九十九年、マインツに開かれた基督教主義勞働組合『第一大會』には、三十七の組合、若くは專科の代表者が相會して、將來組合の採るへき方針に就て大体左の如き決議をした。

一　組合は通宗派的たるべし、即、新舊兩宗派の組合員を包容すべきも、而も、基督教の地盤の上に立つことを要す。宗派的問題を論議することは堅く之を避けざるべからず、又組合は政治上不黨なるべし、即、何等の政黨とも寅緣すべからず、政黨的問題の論議は之を避くへし、但し現在社會制の地盤の上に立つて、法律上の改善方法に就て論議するを妨げず。

二　一定の工業區域内に於ける、各種職業に就ては、成るべく組合を設定すべし、同種の勞働組合は、其所定目的の遂行に便する爲め、聯合して中央組合を形成することを可とす。

三　基督教主義勞働組合の任務は、經濟的、精神的、及び道德的に、勞働者の地位を昂むるにあり、而して之が實行の手段左の如し。

イ　現行法規の實行、及び勞働者の保護を目的とする立法の改善の奬勵。

ロ　組合の自助。
ハ　勞働契約の訂結に就ての、勞働者の權利及び自由の確保

四　組合の行動は、勞働者及び與勞働者間に於ける、同等且つ相互的なる權利義務の承認に基くものとす、勞働と資本とは、相互關聯せる生産の因素なれば、組合の全行動は、和衷的精神より發揮するを要し、その要求は適度を踰えず、而も之が遂行は斷乎たるを要す、罷工は最後の手段として、且つ成功の見込ある時に限り、之を爲すを得べきものとす。

◉一千九百年フランクフルトに開きたる『第二大會』は『全國基督教主義勞働組合中央同盟會』の設立を議定し、之が機關として、各種職業より分遣する委員を組成し、大會の議決の執行、組合設立の奬勵、一般組合の利益の保持勞働組合に關する勞働者運動、其他勞働者の狀況に就ての調査及び統計、機關紙の發行等のことを以てした。この外、尚ほ大會に於ては、組合員の補助方法（殊に疾病、旅行、失業の場合に於ける）罷工に就ての方針等を審議したが、一番八釜しかつた問題は、基督教主義勞働組合と、所謂『超然主義勞働組合』即、宗派、政黨の異同を論ぜず、苟も同種業務に從事する限りは、總ての勞働者を網羅せんとする勞働組合との關係で、基督教主義勞働組合は、寧ろこの超然主義を以て最後の目的とし、之に向て進む方針を採るべきか、されば、現に基督教主義を標榜するは、主として社會主義、自由主義勞働組合の態度に因て餘儀なくせらるゝに過ぎないので、畢竟、一時の方策に止まるのであるか、それともまた、基督教主義といふ看板は、將來永く撤去してはならないものであるか、といふ問題に就て或は、超然主義を取るを可とするもの、或は其の尙早を主張するもの、或はどこまでも基督教主義を標榜すべしと論するもの等、甲論乙駁、諸種の意見が錯出して、頗る紛擾を極めたが、敢て一定の議決をしないで、中央同盟會の委員に調査を托することゝして、一段落を告げた、而してこの調査委員は、同じ年の十一月、『吾人は、吾人が勞働組合の目的を實行する上に就て、今後とも從來の如く、基督教的原則を標準とすべきは自明の理なることを宣言す、諸種の職業に從事する、總べての勞働者が、一組織の下に一致するは、固より期望すべきことに相違なきも、之と同時に、吾人は這般團体の行動が、基督教的原則に矛盾せざらんことを要望せざるを得ず、然るに、吾人のみる所を以てすれば、現時の狀況にては、近き將來に於て、到底此の如き團体の成立し得べしと思はれざるが故に、吾人は、夫のマインツに開きたる、第一大會に於て議定したる綱領、即、吾人の基督教主義勞働組合は、通宗派的にして、而も基督教的基礎の上に立ち、且つ政治上何等の黨派にも偏せざるべし、といふ原則を固持するものなり』と宣言した、而してこの宣言は、翌千九百一年に開きたる『第三大會』に於て『獨乙勞働者を、單一なる組織の下に統一する問題は、現下實際上の意義を有せず、その實行は、近き將來に於て期待すべからざるが故に』といふ理由を以て、大會の承認する所となつた。

（次號完結）

信

己を忘るゝにあり

百目木智璡

人間はどうしても、自己中心の圈内を脱することが難いのである。我等は自己を沒却して天眞流露、宇宙の靈妙と合體するにあらざれば、眞の悟道者とは名けられない。些の僞りなく、飾りもなく純粹の生地其まゝむき出すことは、自己と云ふ考の少しでも打混つて居る以上は、假令自ら勉めて飾らずと思ふても、僞らずとしても、其間に幾分か濁り水か流れ來るものである。古の所謂身を殺して仁をなすと云ふか如き勇ましき、精神が宿るものではない。我等は此精神が欠如して居るから、不安と不平の裡に生涯を送らねばならぬやうな次第である。

兎角吾々は人を觀るに惡方面にのみ專注して、どうかして欠點を見出さうと云ふ考が常に胸中を往來するのである。乃ち其欠點を見出して、他の美き方面をも掩ひ隱くして打ち消さうとする卑劣心に外ならぬ、人は神ではない、人はもとより人である。而も不完全極るものである。何處を叩いても欠點と過失斗りである、多少なりとも人らしき行あるならば、讃めてやらねばならぬ。何事ゞ惡方面のみ搜かして、併せて他の善事までおひ隱さんとすることのあさましきや。思ふに他人の名聲隆々たるを見ては、何かは知らむが、自己の名譽範圍が漸々縮少さるゝ氣持がするからであらう。結局自己と云ふ考へが影の形に副うと同しくつき隨ひて、離さうとしても離れぬからである。

去りとて人を責むるに輕くして、自ら責むるに重くすることは、なか〳〵容易のことではない。自分は惡いと信じつゝ白狀しやうともせず、却て其非を推し隱くして平氣を裝ひ、却て他人の聊かなる過失を見出しては遠慮會釋もなく、苛責するのである。自ら反省するとは夢にも思はない、洵に愛憎の盡きた話である。虎や、狼は殘忍酷薄であるが、吾等の行爲も多く之に讓らぬである。人面獸心とは如何にも吾等の性情を穿ちた語である。自分は飽までえらいと思ふのが抑々の過りで、自分がえらいと思ふから、名譽ある人を妬むのである。自分の非を掩ふのである。乃ち人を人とも思はずみくび

るのである。凡て自己中心の尺度を取りて社會の事物を量らうとするから、衝突が起る原因となる。多數の人類が相集りて社會を組成する以上は、悉く自己を以て律せむとするが如き我儘の振舞は望み得らるゝものではない。どこまでもわが意見を立て主張を貫かうとすれば勢ひ衝突が起らざるを得んのである。殊に偏見なる主張、固陋なる意見を持して自ら高く止まるが如きは猶更らである。我意見を最も近き一家内に行ふとしても、常に苦情百出して圓滿なる結果を見ることがかたい。近親の間柄でも此の通りである。ましてや廣き社會に及すにおいてはいふ迄もない。

全體意見を通すと云ふことをば、一直線に進むことのやうに思ふのが大なる誤りである。甲の人も乙の人も反對の方向より共に一直線に進むとすれば、一方の人が退却せん限り何れかに於て衝突は免れざることである。然るに退却と云ふ事は他の一面より考ふれば正しく敗北の意味が含まれて、甲乙二者の内何れか意見の通らざる事となるゆゑ。我慢の強い我々は退却などゝ云ふ事は容易に實行することが出來ぬ。之れが小にしては個人の衝突となり、大にしては國家の衝突である。

處が、吾々は常に衝突の方面にのみ思考を凝らして、他の方面の最も安全に達せらるべき道を選ぶことを知らない。之に就いて我々は水の性質を研究するがよい。勿論化學的に分析するではない、低に從ふてすら〳〵と流るゝのが水の性質である。若しも其間に何物か遮るものある時は、少しも之に抵抗せず、廻り廻りて低き處のみ從ふて下るのである。吾等が進行すべき路は一直線のみと速了して、敢て他の路を選ぶことをせざる爲め、勢ひ平和を破り衝突を起す事となる。甲の人が一直線に本線より進み來らば、我等は他の方面即ち副線より進まば、毫も衝突の憂ひなきのみならず、圓滑に各目的地に向て進行することが出來る。

以上は世間の事實であるが、偖て我等の胸中には惡念妄想交々生じ來り、衝突の事のみ多くして、信仰の堂奥に進み入ることが至りて難いのである。自己中心の城壁は嚴然として横はりつゝ信仰の水を遮るのである。たとへ廻り道を選ぶとしても矢張幾多の小我が存在して、我が進行を妨ぐるのである。そして自己中心の慾望は充ち滿ち來りて光明界より益々遠ざかるやうの氣持がする。高慢の心や、嫉妬の念が燃え來りては常に我等の行路を遮り、斯くて我等の足下は一歩一歩暗黑に包まるるのである。徒に煩惱のみ繁くして、古人の所謂吾れ我れを喪ふと云へる妙境に安住することは易いやうで頗るかたいのである。要するに我を喪ふとは己を忘るゝことである。即ち自己を沒却することである。自己を沒却すると共に大靈の懷裡安らかに眠るやうにならねばならぬ。此にいたりて我等は宇宙の大靈に接したのである。慈光の世界に攝取せられたのである。我慢強き吾等をして無我たれよと佛の敎へ玉ふは偏に此味である。

雜錄

錫蘭佛跡 其二

松本文三郎

アヌラダプーラは錫蘭の昔の都で、ミヒレターレの東方八哩の處にある。コロンボより滊車にて七十五哩ゆきカンデーに達し、カンデーを距る十六哩北方にマクーレと云ふ處がある。これが今の鐵道の北の終極點である。マターレよりは毎日郵便馬車が一回宛發車してアヌラダプーラに通ふのである。其距離八十四哩にして、此處は佛舍利を以て有名なる土地である。また此佛舍利は印度より持ち來たので、頗る由緒のあるものであるが、其後ポルトガル人が錫蘭へ渡りし時、此佛舍利を取り出して耶蘇の宣敎師が公衆の前に燒き棄てゝしまふた。然るに其後ビクラマバーフ王は其の形に類似した象牙を以て造り上げたのが、當時保存してある所の佛舍利である。長さ一寸五六分、厚さ六七分、人間の舍利と云ふよりは寧ろ鰐魚のやうなものである。

このアヌラダプーラは紀元前五世紀頃は錫蘭の首府であつた。當時駸々乎として文化の隆運は頂點に達しておつた。然るに印度の南方に住しておつたタミュル人が侵入し來て大に之を荒らし見る影もなくしてしまつた。紀元後七百六十九年頃、都を他へ移した。千八百七十二年に錫蘭の中央の州と云ふものを置きて、此土地の繁榮が稍々回復された。今まで衰微しておつた村落も蘇生し、疫病或は饑饉等の苦みを漸く免るゝことを得た。現今に於ては錫蘭の北部に於ける町となつてゐる。此土地は昔の佛敎傳來當時の都であつたから、佛敎に關する事跡の夥しきこと錫蘭島第一等である。マヒンダーガ錫蘭に渡りて初めて會見して佛敎の光を鼓吹して大に歸依したるチッサ王は即ち此處に都しておつた。此都の入口に大公園がある。むかしはマハーメーが樂園と唱へたと傳へて居るチッサ王はマヒンダー王子に歸依した紀念の爲め、むかしビンバサラ王は佛に大なる樂園を捧げたと云ふ故事に倣ふて此樂園をマヒンダー王子に捧げたと云ふ事である。今はたゝ荒寥たる原野にして轉た人をして今昔の感に堪えざらしむるのである。最も公園は頗る廣くして、周圍千二三百間四方に亙る處もある。位置はむかしの都の中央と云ふ事である。此處に塔が建設された、錫蘭に於ける此が始めである。此塔をばトウバアラーマと名けた、最もチッサ王がマヒンダー王子の爲め獻上したそうである。今も其形跡が存してゐる、傳說に曰く、王が此塔を建設した後ち、佛の遺骨を永く此に收め

て後世に貽さんと云ふ考へを起して、印度のアソカ王の處へマヒンダーの甥にあたるものを遣はして遺骨の分配を乞はしめた、數月の後、アソカ王の許可を得て遺骨を齎らして歸り此に收めたと云ふ事である。故に此塔は紀元前三百年前に建築されたもので、印度建築中の最も古きものである。これより推察を下して當時文化發展の狀態、建築の發達の跡歷々として證明せらる。其塔は普通錫蘭にあるものと同形にして、地面の上に圓く煉瓦をたゝみ上げて其上に釣鐘を倒に伏せたやうなものである。古代に出來上りたものゆゑ、格別大きくない、其周圍は六間斗りて、全体の高さは十間位である。從來は塔の土臺は地面に埋沒し、上部は壞はれて居つたが、千八百九十六年に悉く之を堀り出して修繕を加へたため、今は完全の者となつて居る。奇妙な事には其塔の周圍に四重をなして八角形の石の柱が澤山ある。倒れたるもの、傾いたるもの、又は舊態を存するものもある。而して何れも皆一の柱より出來上りて、一一の柱の上には色々の彫刻を施してある。塔の近傍の列にある柱の高さは最高のもので三間半、外側にあるものは段々減して二間半斗りてある。此等の柱は何の爲めに使用された事か今以て不明である。或者は云ふ、むかし塔の上に非常に大なる屋根が四方に廣かりて居つたため、其を支へる處の柱であつたと云ふものがある。又或者はむかしは柱の一つ一つの上に佛の行狀其他の事柄に關したる彫像をかゝげたと云ふものもある、或は單に飾りとして用ゐて儀式を行ふ時に印度其他の佛敎國にて行はるゝ燈明とかお花などをかけたものであらふと云ふものありて、つまり種々の說があれども共に不明である。もと柱の總体は百七十六あつたと云ふ事であるが、今はたゞ三十一殘存してゐる。

思ふにむかしは此塔の周圍に壁が築かれて塔の上に圓い形の屋根があつてそを支へる爲めに出來たものであらふと云ふ事である。兎に角此塔は曠原の眞中に立つてゐる。印度其他にある塔に比し左程大ではないが、形の整備してゐる事は、錫蘭第一の塔であると云ふので、吾々旅行者には最も深き興味を惹き起さしむ、又塔の側に奇妙なものがある。其一は大なる石の中を深くくりぬいて、日本の神社の前に手洗鉢のやうなもので、高さは人間より少し低く、長さは一丈足らずである。其周圍には多少彫刻を施してある。是も非常に古いやうであるが、如何なる場合に使用したかは一向不明である。或は信者が參詣して僧侶に捧げたる米を納れたものであらふともいふ。果して然らば佛敎の隆盛にして多くの僧侶が住しておつた事が想像せらる。今一は長さ一間、巾三尺高さも三尺位の大なる切石である。中間に巾一面に深くして圓形なる穴を堀り付けてある。穴の周圍だけは少しく高くなつてある。今は之をバンドウオルアと名け、元より使用の方法は不明である。後の學者の研究によれば、其穴の中に黃色を融かして

法衣を染めて、一方の平らなる處に木の丸太を渡して絞りたるものであるとの事である。

猶トウパアラーマ塔に、むかしは壁の周圍の內側に御殿があつた。ダラダマリガーバと名く、即ち舍利の宮殿といふ意味である。名の如く佛舍利を保存する爲め作られたもので、今は僅に其形跡が存するのみである。委しき事は知るとが出來ない。

もう一つ吾々の注意すべきは、有名なる菩提樹のことである、此樹はアソカ王のサンガーミツタ妃は、チツサ王の願によつて印度の佛陀伽耶にある菩提樹の一枝を移植したので、保存がゆきとどいた爲め、二千有餘年の間少しも變りなく生々として發育し、現今では世界中最も古いものであるかも知れぬ、其枝は四方に延々として翼を張りし如く伸びて、繁茂限りなく、菩提樹の森をなして居る。其周圍に大なる石壇がありて、信者が參詣の時、種々の菓物を捧げることになつておる。印度佛陀伽耶（ぶだがや）の本來の菩提樹は釋尊成道の後移植せられた爲め、洵に微々たるものであるが。獨り錫蘭の菩提樹は極めて偉大にして何となく一種森嚴の感に打たるゝやうな心地がする。

あたらしき柴のあみどをたちかへて
年のあくるを待ちわたるなか　《山家集》

錫蘭島の由來

故　藤井宣正

左の一章は故藤井文學士の當時の通信にかゝるものにして、松木博士の錫蘭佛跡考一讀したる人は、之をも併せて參考としたらむには、錫蘭島の由來を知るに於て裨益ありと信ずこゝに其一節を抄したる所以也、（記者識）

二十七日、（三十三年十二月）拂曉、船に錫蘭の南端ポンポラ岬頭を廻り、正午には無恙古倫母港　到着致候、午餐の後上陸致し、市街及びケラニー山の佛寺等を見物仕候が此地は此度の旅行中に於て最も余に興味ある處故、巡遊致し候委曲申上候前に、一寸島中及び此市の概略を申述ぶべく候、錫蘭島は印度大半島の一孤島にして、長さ二百六十七哩、幅は最も廣き處百四十哩あり、面積は二萬四千七百萬里御座候由なれば我九州に四國を加へたるよりは、少し少さく、島內最高の山は、八千二百六十九呎と申し、海島としては比較的平地多き處に候、現今の首府古倫母にて、一年間の平均溫度は八十一度、最寒候には六十五度迄降り、最熱候なる四月には九十五度八迄昇り候事も有之候趣、但島の舊都寒泥は、山上故、古倫母より平均十度位は低き由に候、耕地の內、牧場とせらるゝ面積最も廣く、稻田之に次ぎ、椰子畑、珈琲、茶畑なども澤山有之候、象も居り、鰐魚も少なからず、蛇の種類は人種と同

じく、複雜にして多し、人口は、西曆千八百九十七年の調査によれば、三百三十三万二千四百八十七人と有之候が、人種は歐羅巴人及歐亞合ひの子、「シンハレス」人「タシル」人、回教人、馬來人、「ウエッター」人等にして之を宗教により區別すれば、耶蘇教徒、佛教徒、印度教徒、回教徒等に御座候、之れを南方佛教國の中心の現況と考候時は襟首の悚然と致候感じも有之候、耶蘇教は西曆千五百四十三年にフランヽズ、ザビアと申羅馬加特力教の高僧が此島に來りて開教せしに始まり、爾來、新舊數名の教徒は巨多の資力と能力とを費やし、學校に、病院に、種々の慈善事業をなして、布教に盡力し、百有餘年の間に三十万以上の信徒を造り候が、佛教徒は之に反し、殆んど二千年前より根據を持ちながら、其所領は異教徒に奪はれ居り候も、更に氣附たる僧侶は無之樣子、是は全島の人々の大多數が佛教徒なるに眩惑し居り候事と存ぜられ候、元來錫蘭の佛教は印度の達摩阿育王の皇子が、傳持宣布せしものにて、西曆紀元前五百四十三年頃より紀元後千八百十五年に至るまで、全島の支配者たりしシンハレス種族の王が、其種を擧けて佛教に歸依し、國教として之を庇護せしこと淺からざるは、大家に徵して分明なるも、愉安は既毒と申す通り、僧侶は保護になれて懶惰を事とし、學問などを致すもの極めて少なく、又、所謂化他の行は宗風として少しも行はれぬに由り、遂に目下の衰微を招き候事と存候、現今の此島の統治者は、英王の親任官にして、五人の評議官を使用し年俸五万餘圓を得と云へば、日本の總理大臣などよりも遙に優勢のものに候、又、軍備として千六百人を年に凡そ百二萬圓を以て支持し居れば、兵士一人に、平均六百三十七圓餘を費やし、日本兵の七八人分を、錫蘭兵は一人にて吸取致す事と驚き申候、尙、一個條申上度事は、此島の畧歴に御座候、往昔は、此島容易に渡る事能はざりしより、印度人はランカ（楞伽）即「難入」と呼び候事も有之候が、洋上の一孤島、四岸壁立、船を着くべき點なきより、其名を得しものならんと想像致し居り候、實際は平地多く小船をも寄せ得べき點は澤山有之、海上も、我日本海沿岸程の波濤も無之候故「難入」の名は、此島の土人、其性獰猛にして、外人と見れば直ちに迫害を加へ、其肉を喰ふと申勢なりしに由る事ならんと存候、尤も、島内に存する古寺には、巖窟又は山頂に在りて「難入」の實を示し居り候ものも有之由なれど、後世の細工と存候、達摩阿育王が、此島へ佛教宣布師を送りし頃は、此島はシンハラ（執獅子國又は獅子國）と稱し國王天順が阿育王を尊重せし事、及び以前よりの錫蘭王系の事などは、善見律毘婆沙（一切經中の）には有之候が一百六十の王が、佛教を國教として莫大の保護を與へ、其間には知名の大德も出で、著述又は事業の不朽なるものも有之候ひしが、泰西人が初めて此島へ參りし頃は、左程の高僧も居らず、清淨淳撲なりし佛教も弊餘

のみと相成り居り、住民の多數は鬼神崇拜者と變じ、實際は現世の攘災、求福を事とし、或は鬼神の粉裝をなして祈禱を行ふのみに（現今も亦然り）候、是は此島國のみに限らず、他の島國にも、大陸にも大に有之候樣に存ぜられ候が、鬼神も、佛菩薩の化現にして、特殊の功用を爲すものと利用せられ候までは差支は無之候へども根本を忘れ枝末にのみ拘泥致し候に於ては、鬼神崇拜者と賤視せられても詮方無之儀と存候。

さて錫蘭嶋へ初めて參りし泰西人は葡萄人にして、百四十一年の後、和蘭人が葡人を逐ふて之に代り、其後百二十八年を經て、西曆千七百九十五年に英和の戰爭起り、此嶋は英王直轄の殖民地となり、千八百十五年に、遂に英王は錫蘭王を檜にして、英王は此嶋の主權者と相成り、今日にては皆々英王を謳歌致居候とは　國人の申處に候が、實際、物質的泰西文物の輸入は、島民の眼睛を眩まし居候、加之、シンハンス人は、職業上に於ても、富の上に於ても政治上に於けるが如く富者の地位に居り、回教徒が却て歐洲人に次て勢力有之樣に古倫母港上に於ては相見え申候、英國が其殖民地、又は領土の繁榮に力を盡す事は、香港、新嘉坡、彼南等に充分相見え候が、此地に來り更に注意の周到なるには驚き入候。

釋智儼

（華嚴の第二祖）

北村敎嚴

釋智儼姓は趙氏、天水の人なり、父景は申州の錄事參軍たり、母初め夢らく、梵僧錫を執りて謂て曰く、速かに宜しく齋戒して爾か身心を淨むへしと、遂に驚覺す、又た異香を聞て姙めることあり、儼生れて數歲に及て凡量に卓異たり、或は塊を累ねて塔と爲し、或は華を緝めて蓋を成し、或は同輩を率て聽衆となして自から法師となる、生智宿殖此の類なり、年十二、神僧杜順（華嚴の第一祖）あり、漂然として來りて輙ち其舍に入る、儼か頂を撫して景に謂て曰く、此は我兒なり、我に歸し來るへしと、父其道あることを知りて欣然として惜まず、順即ち儼を以て上足の達法師に付して、其をして訓誨せしむ、曉に誦持して曾て再ひ問ふことなし、後に二梵僧の至相（智儼の寺の名）に來遊し、儼か精爽非常なるを見て、遂に授くるに梵文を以てす、不日にして便ち熟す、梵僧諸僧に謂て曰く、此童子は當さに弘法の匠と爲るへきなりと、年甫めて十四にして即緇衣に預る、時に隋運將さに終らんとす、人民飢餒す、儼童稚なりと雖とも志を杭つること彌堅し、後に常法師に依りて攝大乘論を聽く、未た數歲に盈たさるに詞解精微

なり、常に龍象の盛りに集まるに因りて其をして賢義せしむ、時に辨法師と云ふものあり、玄門の準的なり、其神器を覩んと欲して躬自から擊揚して往復徴研するに辭理彌々玉なり、咸く其の懇悟を嘆す、天の縱るせる哲人なり、進具の後四一分、迦一延、毘一曇、成一實、十一地、地一持、涅一槃等の經を聽く、後に琳法師の所に於て、廣學徴心して、隱を索とめ微を探る、時に得意と稱す、儼以へらく、法門繁曠にして智海沖深なり、未だ何に就くべきかを知らずと、乃ち經藏の前に至て禮して自から誓を立て、手に任せて之を取る、華嚴の第一を得たり、即ち當寺の智正法師の下に於て此經を聽受す、舊聞を閲すと雖ども常に新致を懷けり、炎凉亟々改て未だ所疑を革ためず、遂に遍く藏經を覽て衆釋を討尋す、光統律師の文疏を傳へて稍々殊軫を開く、謂く別教一乘無盡緣起と、欣然として賞會して粗々毛目を知りぬ、後に異僧の來るに遇へり、謂て曰く、汝ぢ一乘の義を解することを得んと欲せば、其十地の中の六相の義愼で輕ずること勿れ、一兩月の間靜かに之を思へ、當に自から知るべきのみと、言訖て忽然として現せず、儼驚惕すること良久し、因て則ち陶研するに、累朔を盈たずして焉に大に啓す、遂に立教分宗して此の經疏を製す、時に年二十七、又た七霄行道して是非を祈請す、爰に神童を夢みて深く印可を蒙る、而かも草澤に棲遲して當代に競はず、暮齒に及て方さに屈請せられて弘宣す、皇儲往に沛王に封せられし時、親しく講主たり、頻りに府司に命じて優かに供給を事とす、故に法輪をして輟むことなからしむ、是れ賴む所なり、然かも其庶事を精練して藻思多能なり、蓮華藏世界の圖一鋪を造れり、古今未た聞かざるものなり、總章元年（天智天皇七年　西暦六百六十八年）に至りて夢らく、當寺の般若臺傾き倒ると、門人慧曉又た夢らく、上高憧ありて、上雲漢を侵かす、憧首の寶珠明なると曉日の如し、漸々に移り來りて京に入りて便ち倒ると、儼自から遷神の候なりと覺り、門人に告げて曰く、吾が此の幻軀、緣に從て無性なり、今當さに暫らく淨方に從て後に蓮華藏世界に遊ふへし、汝等我に隨て亦た此志を同ふせよと、俄かに十月二十九日の夜に至りて、神色常の如くして右脇して臥し、清淨寺に終ぬ、春秋六十七、儼撰する所の義疏諸經論を解することハ之二十餘部、皆章句を簡畧して新奇を剖曜す、故に其門寮を得るもの寡なし、門人懷一齋賢一首のみなり、大周の聖神皇帝、永昌元年（持統天皇朱鳥三年　西暦六百八十九年）正月七日の夜を以て、僧等に勅して、玄武北門に於て、華嚴の高座八會の道場を建立して、方廣の妙典を闡揚すること八日、僧尼衆等數千餘人、共に齋會を設く、時に冰瑞あり、御感斜ならす、華嚴を聽くの詩幷に序を製し玉へり、（省畧）之より華嚴愈旺盛、蓋し是れ儼公の偉業に歸す。

隨事遷

天都城

誤りぬるとも躓かずば、其の誤れるを覺らざるべし。臭きにあるもの清きに移らずば、其の懐はしきを信ずるに至らざらむ、いみじくも誤れるはわれなりき。臭きに坐し、清きを誹れるは寔にわれなりき。

心靈的麻痺に知覺を失ひ、風船玉にも似て尨然とひろごり行きしは、わが過去の跡なりき。いかなればかくは迷ひし、その跡尋ねんも今はむげの業なり。げに迷ひぬる心は、その上に高き宮をば建てしなりき。その蜃氣樓なるを知らずして。

嵐は吹き荒びぬ。篠突く雨は降り來つ。こゝに蜃氣樓は安しゝと云ふを得べきか。日の光はあか〳〵とさしこみぬ。塵芥そこに見えずと云ふを得べきか。雲は開きぬ、野は笑ひぬ。心は新しき光に浴しぬ。

いかなれば進歩は戀ひしかりしよ。なにとてわれはかくばかり野心に親しみ、榮達功名に耽りしか。野心と進歩とは寔に兩立するを拒まざる良友なりけり。彼等は共に驕さて、人を倒し、人を蹴り、人を蹈み、あらゆる人類をばおのが脚下におかんと約しぬ、恐ろしき約ならずや。こをきゝてわれは棘然と戰くをなさず、却りてその凜々敷武者裝を愛でつ。サーベルのひらめきいかに勇ましかりしよ。かくてわれは全くそれに醉ひぬ。

戰爭なるかな、格鬪なるかな。力を以て仆し、力を以て奪ふ。かゝる勇士にぞオリンピヤの冠はかゝらなむ。是れ人生の眞相なり。こゝに宗教家は人生の意義のしかあらざるを述べ、哲學者は更に事物の幽玄奥妙に入るべう訓ふ。言ふ所寔に高かりき。然れど理露高遠到底俚耳に徹するものにあらず。時にダルヰンに聞く、生存競爭、適者生存の理法あり、萬衆一切を支配して、餘す所なしと、實にや事例累々として、遠く目を放ちを要せず。人の腐集する所盡く其の標型なり、この見地よりして公德の叫びを聞けば、鬪爭に堪えざる婦女の見。慈善とは强者と弱者との按排調和。平和又然らざるを得ず。平等博愛面皮一度剝かばその眞相又生存競爭にあり。世に弱者は多し、故に弱者の爲めに計るは好望を博する所以好望を希ふは軈て勞なくして幾億頭顱を蹈台とするの奸手段。見來れば人の行度は盡くこの適者生存の法則に從ふ。かくして人生苦悶あり。叫喚あり。こゝに基督は生れぬ。煩悶を救ふべく、慰藉を與ふべく、佛陀は來りぬ。有爲轉變の世に常住の光明を齎して。されど兩聖脆くも肉と共に朽ちぬ。唱ふるは徒にダルエニズムなりき。

進歩とや、進歩は標的を豫想す。さらば何處に向ひこの進

程をか云ふ。野心ありと云ふ。野心とは事を遂んとするの大抱負、さらば何をかなさんとする。この二主義を崇めつるわれは、常に血に渴きぬ。人の上に傲然たらざるは極めて苦しきことなりき。令名己を壓するものはいかにわが心をいためしめしぞ。

標的なき進程、事業なき野心、空漠糢糊、かくばかりをかしきはあらず、浮雲の如くば、東に進みて西に至らむと思ふこともあるべし。而かも態度は眞面目、否狂せりと云ひたる方しかるべし。げに思へばわれは徒に進歩の名にあこがれたるなりき。斯くて山の頂に達せむとてある山の荊棘をわくる折りもありき。笑ふ勿れ悠忽極りなきは電光の常ならずや。

この意に於て、平和は進歩の敵なりき。寔に平和は沈滯の意なりけり。沈滯は腐敗にして、意氣の銷沈はこゝより來ると思ひぬ。獨身生活は進歩の熱實なる讃美者なり。肉親は煩累の基、勇士の後髮を引く慊はしき裏切者苟も塁を陣頭に横えんずるものは、必ず之を蔑視すべきなり。況んや女は弱きを以て特質とす。依りて人よく之を松柏に纏ふ蘿葛に比す。善哉、蘿葛は常に宿木を害す、少なくも松柏の天壽を短からしむは、植物學の認むる所にあらずや。而かも女に比し、やゝ力ありとする男子と雖も、常に處理に裁斷流るゝが如きは望むべくもあらず。食餌に追はれ、あたら一生の理想を沒却するもの、比々として然り。こゝになほ弱きと合す。遂に營々の苦、大目的、大理想も泡沫と歸せん。

鶯は歌ひ、鈴虫は哀を囀たん。されど人若し是れのみに心奪はれ終日なすなく、そこに行死せんには、人何を以てか之を評すべき。詩人は人を歌はなむ。されどそは尊き人生を遺却したる迂者を憐憫するの言のみ。賞讃にあらず、唯それ憐憫のみ。

戀を歌ふ。かゝる男と女との間にかゝるうるはしき響をとゞむとや。そはにげなし、若しありとせば動物的發情の果にして、獸の雌の雄と、雄の雌をかたみに求むると等しからめ。

自然を讃ふ。色彩なき寧ろ單獨萬條の野に山に、溫き思を浮べ得る術ありや、死物なり、土塊なり、而して自然の美を稱ふるあり。僞れの甚だしきや。

斯の如きを連ねてこゝに及ぶは過去の思想に鞭つ想あり。されど過去の想とは夏雲なりき。今や殘れるは此の片々のみ。その多くは消えつ。戀の動物的發情てふ迷骨は明き日に見えずなりぬ。自然の鈍き額はこゝに喜びの皺を彫りぬ。詩人は力あるものゝ上に坐せり。生存競爭に汗粒々たるは惡魔に咀はれたるものなりき、げに咀はれたるはあはれなるかな。道に荊棘を分つは光明に達せんすべにあらず、いや暗き地獄の鍵を握らむ料のみ。

文苑

雜咏

句佛

小說に蜜柑の汁のかゝりけり
葡萄取る女だてらの櫓子かな
煙草干す庭の稻荷の神垣に
海近く石を切り出す紅葉かな
秋晴を子供船頭の小舟かな
稻を刈る若き女や雀笠
ゴム紅葉ペンキはげたる村役場
紅葉見や土器投げを試むる
あじきなや草鞋刺したる栗のいが
掛稻に近き鎭守の鳥居かな
朝霧や烏のとまる刎釣瓶
牛鳴いて夕霧こむる小村かな
ひら〳〵といづち行きけん秋の蝶
花木槿張物板に藍のあと

天長節

秋王の菊の御宴の延喜樂

吟二

柴の戸や葉枯れて殘る烏瓜
歸りきて火鉢の冷えをかこちけり
柿むいてひもしい腹に新酒哉
兵兒帶の古きを探し厄拂ひ
日を背に小春の椽や寫し物
星凍る夜や胡茄の聲一しきり
稻塚に雀群るゝや雪の朝
佛像の闇に輝く寒さ哉
深更や櫓の聲さゆる下り舟
倉の壁に松の木影や冬の月

麻郷

南天の實になく鶇や今朝の冬
雪空や小鳥幾群なき過ぐる
月さびし枯野の狸皷うて
路問へば啞の手眞似も枯野かな
湖にうつる立木の落葉かな
落葉する榎の下の湯殿かな

凡によりて椽に居眠る小春かな　求道學舍

曉や埋火起す讀書人　同

談笑や庵主を圍み藥喰　同

炭取に腰うちかけて議論かな　同

二三人洋燈掃除や霙れふる　同

山茶花の散るや落葉の庭もせに　同

蕪汁の盡きて朝寒の悔もあり　同

小十能に火を運ふ人廊寒し　同

小春日を庵主笑ふや電話口　同

東北の人多くして冬籠　同

しめやかに法話の雫を時雨けり　同

某々二三子に戯むる

かしこさの夜半のすさびの燒芋か　同

病を獲て

冬の夜や病床に讀む嘆異鈔　同

故人を懷ふ

木枯や君をしのびて寐ぬる夜に　同

煤拂ひ親類の娘も見えにけり　麗村

煤拂ひ庵主が顏のひかるなり　同

靜かなる夜の禁裏や鉢叩　虛靜

食卓の上の土鍋や冬の蠅　同

疎林あり風音凄き枯野哉　同

千鳥聞く濱の宿屋の鹽湯哉　同

松間に柏は寒き姿哉　同

柊や小春の社頭鹿遊ふ　同

北風や炭荷馬引いて城下迄　曉村

雪解や小炭をおろす鍛冶か宿　同

溫泉の宿に釜の下焚く枯木哉　同

氷柱ふく風に戸をくる暮の家　同

水汲は早く起きたる氷柱哉　同

豆腐しぼる手許に落つる氷柱哉　同

初冬の古綿買に訪はれけり　素水

山高き國に入りけり今朝の冬

反古を貼る消炭壺や今朝の冬

初冬の茶釜の尻も鑄かけぬる

今朝の冬汲むに短きつるべかな

爐開の遲き朝餉に向ひけり

爐を置いて外は風吹く夕哉

爐を置いて坐る後の柱哉

山茶花に霜解の朝爐を開く

爐開のえしき炭に灰淺し

塔影微吟（二）

雲底里人

さゝ川の水の光に夜は明けて木下落葉にみそさゝゐなく

小春日の窓暖きガラス戸に響くもうれしモルモットの聲

時雨する松山の麓篁の竹のうら〳〵日の照れる見ゆ

我兒等か雀取るとう鳥おとし雀も來なく背戸にしぐるゝ

羽音して鷄の居るらし暖かに小春日のさす小障子の外

炭燒の烟たちたつ此わたり山暖かに歸り花さく

語はぬそのさびしさもうれしみて暫もかなと訪ふ我身かな

春を待つ心友にも秘めにつゝ鉢の紅梅日も落ちす愛づ

夢の吾

しげる

夢みる吾の醒めたるやさめたる吾の夢見るや

春は夢よと敎ふれど吾はさめつと獨り笑む

望みてかなふ世なりせば誰れか悶えに涙ある

吾から暗にまどふより夢裡にほゝえむ吾冀ひ

賢こき人は智になやみ詩人は苦き鉢をかむ

吾は才なき野人のむれに平和快樂を歌はなん

謠へ吾友やわらぎを惡魔も我を襲ひ來ず

行き惱むへき闘もなく光りは常住に四圍を卓むあゝ幸なりや夢の吾

涙の慰藉

孤樽

などさばかりに悲まむ
樂しからざるものなきに
君が眼のうるみたる
今し確かに泣きやせし

「けにもさびしく我泣きぬ
そは自らのかなしみよ
心ゆくほどなかむとき
重き心の輕う見ゆ」

樂き友は迎ふなり
來れかしその同情の上
何をか君は失ひし
打ちあかしてよ汝がこゝろ

「のゝじりあひて悟らずな
幸なき身をば苦むるもの
否とよわれを失はじ
もと〳〵手には落ちざりき」

さらば直ちにひきたてよ
若き血注ぐ身ならずや
汝が年頃ゞちからあり
成就ぐるに勇氣充つるべし

「否な〳〵とぐることあらじ
そはげに遠く且つ高く
かゞやく姿うるはしき
かなたみそらの星のごと」

星とやいかで求むべき
たゞに光をあふぐのみ
こゝろ感たれて晴れ渡る
夜ごと〳〵に凝望むのみ

然なりいたくもうたれつゝ
幾日の世か仰ぎけむ
されど夜の間は泣かしめよ
切めて泣きうる吾がかぎり）

（ゲーテ）

海濱の秋夜

みそらよりこそたろがれて
近きもすでに包まれつ
はなつ光りのやさしくも
登りそめたり幕の星
凡て朦朧にうごめきて
さぎり高きにまよふなり
海靜やかにうばたまの
黑の幕をばうつしぬる

あゝひんがしの空あなた
月の面こそしたはるれ
柳のさ枝たわゝにも
よするうしほにたわるゝや
潮風そよぐその影に
月神の美光はうちふるひ
冷氣さやかに眼を入りて
燃ゆる心にそゝぐかな

《仝》

讀星巖詩集（二首）

藤井無絃

蟲冷燈青四壁空。獨繙遺集憶星翁。凌雲豪骨膽如斗。絕世雄才氣吐虹。遣興秋冬與春夏。觀風南北又西東。篇々擲地戛然響。便是勤王鐵石衷。

讀去讀來思不窮。扶桑亦有浣花翁。雅懷一代雖逃世。志節當年猶奉公。字々爭光玉池月。篇々帶響鴨川風。可憐掩卷三更後。滴露聲寒百尺桐。

古戰場

寒煙冷霧鎖黃昏。一望淒然古戰原。勝敗兵機眞可悟。忠奸心術亦堪論。稜々怪石橫枯骨。唧々陰蟲哭怨魂。滿目紅楓霜後色。依稀猶見錦旗翻。

＊　＊　＊　＊　＊

丹楓樂

天津、白林

◎好事にあらず、風流にあらず、眞面目なり。われは久しく人事に疲れぬ。死文字空言に倦きぬ。車は軋り、煙は黑し、枯淡の生を救ふもの、自然の靈氣にあらずして何ぞ。貝殼の中に自然の微妙を悟り、黃塵の巷に自然と徂徠す。詩

人の心は壁限るべからず、物妨ぐるを得ずと云ふ。噫けがれ易かるわれは狹斜の巷に柳下惠を學ぶ能はざるなり。況んや秋すでに闌に、一葉の凋落決して意味なきにあらざるをや。

◎丹波山より一里ならざるに、一度痔せたる山は再び急に、道は尺に充たず、兩岸盡く斷崖、又深潭、水の若げに走ること昨の如し。紅葉の時雨一しきり、腸爲めに濕ひぬ。

清いかな此の水、頑なりやこの石、清きは慕はしく、頑亦捨て難し。素朴の橋、露の修飾なくして自らふさはし。後に山、前に山、萬山盡く紅、われは全く秋の懷に抱かれたるなりき。

◎風冷かに谷底より起る、降り來しもみぢ葉、掀飜、巧みに舞の手振をなす。

◎わが道は螺旋なり、人その一角に立ち、尚ほ我れに達せんには時余を要す。小手かざして顧みれば人豆の如し。斯の者に意志ありと云ふ。實に意志とは、毛虫に見るかたくなる性にてあるなり。

◎こゝ全く深山の奥、音なすは獨り水のむせぶあるのみ。風さら〳〵、誘はれぬるは涙なり。思へるにあらず、悲しきにあらず、さればその涙溫きか冷きか又知るを得ず。落葉脛を沒して、薄自ら慄く。木朽ちて道に横はる。心に猿の襲ひにあはじと恐れぬ。

ア、山の起居は劒を用ふるに似たるかな。一上、一下、開きて閉ぢ、塞がれる所、自ら道あらはる。開ける所概ね水を横に渡る。高低相映じて面かも云ひ知らざる味のある、昔時五條の橋頭美少年牛若花の裝芳ばしく、剛骨無双の辨慶と太刀うてるとも見つべし。

◎楓一樹美なるにあらず、石一塊佳なるにあらず、總体に於て秋山の良を構成す、末乾れの微草、命なき古木、またその門外漢にあらざるや當然。われはこゝに神の攝理を見たり。實に自然は凡の如くにして大なり。此の汚き人の子をまで收めて以て一幅の畫となせばなり。

◎此の景を畫かんとす、徒に出づるは抽象の文字のみ、偉也、大也、佳也、美也、そはそのベストを盡せる所以なり。人此をきゝて茫然自失、其の景をば眉宇に浮べ難からず、されど大なるは往々にして然り。

◎詩人想枯れなば此の水に見よ。畫家モデルに欠かばこの山に見よ。野ばら、はげとう、村童、村女、のみ自然の俤にあらずかし。若し野趣に味ありと云はゝ、こゝは無上無盡藏の境なり。

富士の麓川口湖より

崇絶の大自然に對して、今更に人の言葉の不完に驚かるゝ哉。朝來舟を艤して、思ひのまゝに湖面を漕ぎまはり、今はやゝ疲れたる舟を湖心鏡の如き所に浮べて、われ靜かに靈山に見入る。噫遙かに京地の友を思ふにつけても、如何にして此の感懷を頒つべき、打ち仰ぐ雪嶺、聳えゆ雲かにして、一帶の裾野は目も遙か、こゝに幽湖一碧、靜かに靈岳の姿を倒涵す。秋の日今湖面に弱く落ちて、細波のさゝめきも夢のやう。湖を圍む。三方の山は霜枯の眺めあはれに、初冬の氣は早くも谷合にあまねし。あゝ靜かなる平和、偉なる平和、うち見惚れつゝ、われはこの平和に接する思ひ、舟うつ波の嘯きも天地の胸の鼓動にあらじかと疑はる。開け、今胡北の山下に太鼓の遠響は、大石村に豊年を喜ぶ神樂のそれか。南は富士の麓、烟の長うたち昇る邊より、鷄鳴細うかすかに聞え渡る、舟津村にや。見る、鵜の島西に泡のやうに浮み上れる、うしろよりそなたを限れる山の、あまりに低きが肩越しを雪の峯一つぬつと顔をあらはせる、甲信の界にそゝり立つ、例の怖ろしき山にや。昨日越したる御坂峠、東に高う聳ゆ、あゝ已みなむ、いかなる人の言の葉が直にこの崇絶の自然を寫し得べき。おゞや、われこの壯觀をわが拙き筆もて兄等に頒たんとしつゝあるなり。許せ、われは又た囁嚅たる自然に加ふることによりて、美の靈を穢さゞるべし。人はたゞ見惚れあこがれ、而して其の全き自己を擧げて此の美の靈に沒入すれば足る。

そめてけり紅葉にいろのくれなゐを
しぐるゝと見えしみ山べのさと

（山家集）

新刊紹介

佐々木月樵著
◎實驗之宗教　本郷文明堂

宗教の生命は信仰にあり、其生命たる信仰を捕へんとする、もとより理論的研究によりて得らるゝにあらず、批評的態度を以て求めらるゝものにあらず。必ず之ハ實驗に訴へ、自己内心の實驗に照して宇宙の大靈に接せざるべからず、これ本書の著ある所以也。

題して實驗の宗教と云ふ。吾悉く著者の内心實驗の泉より迸り出てたるもの也。其如何にして宇宙の霊妙に觸るべきか、信仰の確立を期すべきかは本書既き盡くして些の遺憾あるなし。意ふに著者の信仰は不動の地盤に立てり、著者の言論は極めて直截簡明なり、たゞ直截簡明也、一點の疑義を其間に容るる餘地なき也。信仰の問題は漠然として要領を說破するに容易ならざるに拘らず、著者の言自は明快にして秩序的也、たゞ秩序的也、此を謂過するもの何物か心裡に得たる心地する也。著者は佛教、弘法、道元、日蓮、親鸞等の宗教的偉人のあとを尋ねて心靈上の師表としたりと云ふ。乃ち著者の修養遠く淵源の存するあり、實驗の力亦偉なる哉。

されば宗教的偉人の面目は著者縱横の健筆によりて躍然として紙上にあらはる。若し宇宙の大靈凝りて宗教的偉人の人格を成すと云はゞ、吾等は本書に依りて直に宇宙の大靈に接するの思あらむ。宗教の生命を捕へ眞髓を得んとする求道の士に向て敢て本書なすゝめんとす、蓋し近來の良書也。（六十錢）

宗教研究會編纂
◎宗教大觀　芝鴻盟社

松本、村上、前田、井上、登江の五博士あり、耶教には海老名氏あり、佐治氏あり、其他教界の名士十數名の論文を收めて彪然として大冊をなす。眞に宗教の大觀たる名稱に恥ぢずと云ふべし。

本書は曾て宗教研究會に於て、各大家の講述せられたるものにして、哲學あり、倫理あり、耶教の教理を說くあり、佛教の本領を論ずるあり。何れも各大家の卓識高見を發表せられたるもの、恰も、園菊美を競ふの趣あり。宗教の一般を窺ふに於て餘りありと云ふべし。

海老名彈正著

◎基督之大訓註釋　本郷文明堂

著者は基督教の名士海老名氏此人によりて古へより有明なる基督の山上の垂訓を信仰的に註解せられたるもの、よく基督の眞髓を說き其堂奧に進したるものと云ふべし。著者の序文に『耶蘇の敎訓に註解を加ふるは、吾人の固より憚り懼れる所であるか、しかし其一小徒弟たるものが、聖師の意旨を如何に解したるかを發表するに外ならざるのであれば、必ずしも僭越とは言ふべからず』云々と著者の用意すでに如斯し、徒に漫然筆を下したるものにあらざるは明々白々たり。たとへ該信徒にあらざるも、言々句々一として趣味の深からざるはなし。況や信徒に於てをや。意義簡明にして文章亦平易なり。何人も一讀了解するを得べし。（定價六十錢）

小波編

◎世界れ伽噺（第五十二編）　東京博文館

是は獨逸にても有名なる中古の勇士の譚りを譯せられたるものなり、鬼ロウベルトと仇名せらるゝ程の大名にして、はじめは亂暴にして猥に人を殺すなどして遂に國より追ひ出され山中に入りて賊の頭分となりしが、偶然生みの母に解逅してうの眞情に動かされ衷心懺悔の念を生ず羅馬法王の下に參して贖罪を乞ひ神の命令にて啞となり犬の眞似をなすなど千辛万苦、羅馬に戰爭起るに及んで大功を奏し國王の娘を得て鄉國に歸ると云ふ目出度筋書なり。いつもながらすら〳〵として書振りも目出度しゝゝ（定價七錢）

小波作

◎新伊蘇普物語　東京博文館

明治お伽噺第七編として發行せられたるもの、曾て『少年世界』に於て少年讀者より面白き出題を得て、小波氏の思考をこらして物せられたる小話を一より五十八題まで收めたり。中には『閨覽と連』の如き奇題あり。邪氣なく、罪なく頗る面白く讀まれぬ。少年諸氏は定めし狂する程嬉しかるべし。（定價十二錢）

◎敎界時事　麹町該社

曾て噂のありたる四本願寺當局者の不當處置に憤慨して奮起せる高輪大學有志の機關雜誌にして、全紙悉く生氣を以て埋むの感あり、眞に是れ革命の先鋒也。吾人の聊か憾とするは紙上に責任者の署名なきこと是也。正々堂々相對する以上は匿名を以て攻擊をなすか如き、恐く天下の同情を惹き難かるべし。敢て一言を呈する所以也。

◎平民新聞　麹町該社

さきに非戰論の後合ずして、朝報社を退きたる幸德、堺二氏の主宰する社會主義の雜誌也。一言にして云へば、清新の筆、これ本誌の特色を示す文字也。

◎同朋　神田光融館

通俗佛敎の改題にして主として村上博士の講演を掲載すと云ふ。博士の講演は平易にして、定めし一般の人々の喜ぶ所ならむ。切に永續を祈る。

◎竹風香處讀　本郷文明堂

前田博士の隨筆を集めたるものにして、小品と雖も、興味津々として盡きざるを覺ゆ。又以て博士の溫厚にして篤學なるを窺ふに足る。

長谷川天溪、梅澤和軒、中島孤島譯　東京春陽堂

◎美術概論

原書はエヤンバラ大學の敎授ホルドヰンブラウン氏が著にして、早稻田出身の秀才たる長谷川、梅澤、中島三氏の抄譯にして、混沌たる我美術界に向て一道の光明を與へたるもの、題して美術概論と云ふも形而上學より之を論ずるにあらずして主として繪畫、彫刻、建築等の有形的藝術に論及したるもの、美術鑑評家、製作家の由て以て思想の立脚地を確定するに必用欠くべからざる良書也。

試に本書の內容を檢するに、第一部、第二部、第三部に分ちて、第一部に於ては即ち藝術の起原、祭祀と古韓美術の形式及び中古のフロレンス及び其畫家に就て項目を分ちて詳細に論究せられ、第二部にては有形美術に於ける効果、有意としての美術品并に美としての美術品に就て、第三部は有形美術に關する建築、彫刻、繪畫に就て丁寧に抄譯せられたるは著者の勞洵に多とすべき也。

本書を通讀するにあたり往々警句を掬みて吾人に少なからざる裨益を與ふるものあり。例へば繪畫を論しては『繪畫の難關は、唯夫れ活現にあり』との一句の如き、何たる天來の妙音ぞ。鑑評家も此言にきくべし、製作家も此言に耳を傾けざるべからず、一般の美術家も亦大に味ふべき金言なりとす。殊に圖畫を揭けて說明の便を計りたる、用意周到なりといふべし。本書の價値甚だ多く云ふを欲せず、而して譯文流暢にして絕えて難澁の句なきは喜ぶべし。敢て美術に志あるものゝ一讀せむことを望む。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

閑文字

◎淺草婦人會に中山幸子夫人あり。齡、已に六十の坂を超ゆると雖、矍鑠として氣焰萬丈、時に壯者を凌く。頃者清浦農相を訪ふ。清浦氏徐に口を開いて築地本願寺の婦人會に入らむことをすゝむ。女史言下に之を退け、且つ曰く吾はたゝ一の淺草婦人會あるのみ、と。農相話頭を轉して東本願寺の窮狀を說き暗に攻擊するものゝ如し。女史色を變へて曰く。請ふ人物を見來れよ、南條博士、井上博士、村上博士あり、故清澤師もありしにあらずや。濟々たる多士、以て東本願寺を飾るに足る。三百の負債何かあらむやと、農相たゝ苦笑するのみ。女史の家もと禪家に屬するにもかゝはらず。專心一意婦人會に盡すこと多年一日の如し。婦人會の今日ある豈女史の力多からずとせんや。婦人會此女史を待て聊か誇るに足らむ哉。

◎蕃根の詩に曰く。

未識敎妻訓子道。無才無德與人疎。生來何事愛文字。記得前身是蠹魚。

◎不老仙若翁を訪ふ。壁間骸骨一幅の圖を懸く。これ大谷派の碩學龍溫講師八十五歲の筆にして、雲烟飛動、寓意收め盡すか如し。自賛の句に曰く。

殘月樹間落。鳴蟲艸外寒。風灯壽未滅。猶作它身看。

◎鷗浦仙人居を巢鴨の邊境に占め、北星僑と名け。詩人を氣とるところ面黑し。句あり

富士の風八州めぐりて霜白し
曉や地に霜白く天に星

報道一束

◎『時』は吾を待たずして、花落ち、水流れて今年も餘す所二旬。日月の電馳今更の如く感ぜられ候。げに無常迅速の世の中に候。されど希望は將來に輝きつゝあり、こん年を待ちて勇ましく進み度存候。

◎近來功利主義の激流侵入し來りて、名勝古蹟のいたく踏み荒さるゝは頗る遺憾の事に候。今又聞く處によれば、丹後の天の橋立、大和の笠置山の二名勝は姦商の手によりて慾望の烟塵に付し去らむとす、返す〳〵も恨事に候。

◎大日本佛敎靑年會幹事新保氏辭任して泉文學士代りて新幹事の職を帶び候。

◎帝國議會は今五日召集議長には久しく逆境の地にありし、東北の一名士河野廣中氏大多數にて其光榮を擔ひ候。『二六新報』は曰く、故片岡氏の後任として議長選擧を行ふや。氏は三百五十票てふ空前の大々多數を以て、候補者の第一位に當選せり、氏か宿昔の意亦以て酬ふるに足らむ歟。而して前議長片岡氏が耶蘇敎徒として溫厚廉直の君子人たりしが如く、氏は佛敎信者として慈悲忍辱の大人物たりとすれば、我か議會も亦絕好の代表者を得たりと謂ふも不可なからむか。と。願くは誠意其職を盡されんことを望む。

◎齋藤唯信師は來春より獨力にて佛敎主義の雜誌を刊行すべしとの事に候。

◎この度九段佛敎倶樂部內に土曜講話を開設し、名けて第

二求道會と致し候。初會は先月廿八日午後二時より開會、場所柄とて初めての會にも拘らず、聽者八十餘名これあり候。第二會は百二名にのぼり、追々盛會に相成候事と存候、演題は左の通りに候。

著問と安慰（十一月廿八日）　近角常觀
漣伽梵歌及起信論の他力教（十一月五日）　楠龍造
冷かなる理論、温かき信仰（同上）　近角常觀

◎其後の求道學舍の日曜講話の演題如左。

識人物　楠龍造
余が信仰に付きて質疑に答ふ　近角常觀
如何にして如來に接すべきか　曾我量深
佛本生の話　近角常觀
自覺論（十一月二十二日）　佐々木月樵
人生の眞趣（同上）　近角常觀
鎌倉時代の宗教的自覺（十一月廿九日）　楠龍造
親鸞聖人の性格（同上）　近角常觀
信仰談（十二月六日）　曉鳥敏
信仰は門戸にして亦堂奥也（同上）　近角常觀

◎西本願寺高輪の有志者は益々反抗の火の手を高め候。佛教大學をば本山より分離して獨立の意氣込の由。時將に天凍りて肅殺の氣にあたりぬ。幸に諸君の奮勵一番を望み候。

◎『二六新報』は一大自白と題して、府下に於ける所謂大新聞と稱する發兌紙數を報道せり。而して自身の新聞紙を首位におけり。自白固より不可なからんも、自身の賣高の多きを誇らむとするの心事見えすきて淺ましき心地せられ候。

◎近頃眞言の僧侶にして去勢術を行ふもの有之候。去勢術を行はねばならぬ程墮落せしかと思はれ、悲しく候。兎に角僧侶の奇行はほむべき事にあらず候。

◎各宗管長會議は去る二日名古屋市に於てひらかれ候。議題は云ふまでなく日蓮寺創立と菩提會の件に候。

◎福澤諭吉氏曾て慶應義塾に大學部を設けんとするや、勝海舟翁を訪ふて謀る所ありき。翁靜に誨へて曰く。請ふ君の財産全部を擧げて學校に寄附せよ。君の生計費は別に余より送らむと。蓋し翁の言奇矯に似て決して奇矯にあらず候。今の事業經營するもの、此言に耳を貸すものありや、なしや。訝かしく候。

◎本誌もこれにて本年の終刊と致候。謹みて讀者諸者の健全にして越年せられむことを祈り候。

日曜講話
毎日曜午前九時より
ひらく
本郷森川町
求道學舍

第二求道會
毎土曜日午後二時より開く
九段坂
佛教倶樂部
開設

◎但來る一月第一日曜日に限り休會す
◎但來る一月第一土曜日に限り休會す

山村水郷

《羽村の一夜》

劍虹

◎一樹の蔭、一河の流多少の緣とぞきく。げに何事も不思議の緣に惹かさるゝぞうれしき。同じ佛の敎を信じ、佛の光りにつゝまる吾等には因緣てう語のいたく胸の奥底に皷動を傳ふるやに思はれぬ。思へば神無月の末つ方、突然と一面識なき人より一封の書面は我會に來りぬ。裏を改め見れば府下西多摩郡羽村と記されたり。大方、雜誌の注文にやと封押し開けば、目的はそこにあらで、近頃我村落に於て耶蘇敎の蹂躙甚しく我々佛敎者に取りて如何にも殘念に思はれぬ。近々佛敎演說會をひらくにつけ、貴會より誰ぞ出張を請ひたしとの事なり。用事は是のみ。極めて單純なり。別に不思議の事もなし。田舍の靑年が一時客氣に驅られて異敎徒に對して反抗的態度を取るとは、さして珍しき事もなく極めて有り勝ちの事なり。此書面恐く亦然らざるかと思ひぬ。若しさあらむには佛敎の爲め寧ろ悲むへき事と感じ、兎も角一度來られよと返へしを送りぬ。越へて數日の後、果して純朴なる年若き人が尋ね來りぬ。乃ち我等の宗敎の考へをあらまし說きしに大に得る所やありけん、其意を諒して欣然として歸へられぬ。

其後一週も去り、二週も過ぎし頃。再び書を寄せて、さらばこの月（十一月）の十七日一泊の用意にて來會せられたしとの報を得たり。やがて當日近角兄と余との二人は羽村をさしてゆくべく、飯田町停車場にゆきぬ。いづもは空車の多き列車も此日に限りて何れも溢るゝ程の乘客なり。冬近き空は低く垂れ、風冷かにして身に泌み込むの思ひす。滊車中野驛を離るゝ頃より、眼光頓にひらけ、野外の風趣一しほの眺めなり。國分寺より立川に至るの間最も野趣に富む。樹々皆紅葉を帶び、流に沿ひて枯尾花の嬝々たる一として活畫圖にあらざるはなし。立川驛にて靑梅線に乘りかへぬ。列車の小なる龍ヶ崎の輕便鐵道のろれに似たり。二驛を過ぐれば羽村なり、二三の有志來りて迎はれたり。時將に暮に近し、七時より開會との事なれば時尙早し、乃ち散步を試む。步して多摩川の上流にいたる。前面山を負ひ涼々として流れ、潺々として耳を洗ふ。暮色すでに至りて咫尺を辨ぜずと雖、山川意ありて吾等を止むるが如し。すでにして鐘をかへして會場なる禪林寺にいたる。老僧快活よく語りよく談ず。維新の變に際して一たび身を俗界に投ぜしも亦志を翻へして頭顱の身となり、佛恩未だ酬ゐずして漸く老いんとす。唯諸君の努力に待つあるのみと。流石は禪林の老僧なりけり。

すでにして時刻は來れり、聽衆は堂に滿つ。發起者は起て挨拶をせり。次で吾は宗敎の必要に就て四十分計も述べぬ。論旨徹底せずして吾ながら耻かしき思ひをなしぬ。最後に近角兄は起てり。見渡す所小學校の兒童二三十名列せり、隨機說法としてお伽噺を語りて先づ大に人心を收め、後ち徐に話頭を轉じて靑年と宗敎との關係に及ぼし、詳に人情の機微を穿つて聽衆に感動を與へたり。暫時休憩の後、近角兄向一席を辯ぜられたり。そは釋尊成道より說き起して、日本佛敎の歷史發達より將來の佛敎を論及して壇を下れり。七時より十時まで

三時間に亘りしも聽衆少しも倦むことなく、一々耳を傾けて深く味ひたるやに見ゆ。きく此地未だ曾て佛教演說を催したる事なしと云ふ。而して如此聽衆あり、如此熱心に耳を借すあり。佛の力亦なる哉。而して此會をひらくに至りしも地方寺院の僧侶は一人も與らずと云ふ。發起人と云ふべきは僅に三人にして曾て資を他に仰がずとの事也。此青年の道を求むるに熱心なる吾等の耻る所、尙出來得べくんば隔月に一回づゝ催して共に佛陀の慈雨に浴せばやと云へり。因緣は洵に不思議なり、佛種は到處に播布せられつゝあり、唯之を培養するの好傳道者なきのみ。青年の發起者とは誰ぞ。小作伊助、並木善助、石田才一の三氏なりとす。

時は移れり、發起者は吾等を導きて停車場前さゝやかなる家に案內しぬ。折しも冷雨ふりしきり、床溫かならずして夢も結ばれざりし、翌朝はれ渡りぬ、發起者來りぬ。共に山に遊ばんとを約す。時に戶外喧すしき音す、何事にやと耳を欹たつれば老夫婦の飴賣の謠ふ節おもしろき爲め兒女の一群後に娓してかくは騷々敷なり、近角兄若干を投して兒女に飴を施す、田舍の質朴なる幾度か低頭するもうれしかりき。主婦は老夫婦の手踊を求めぬ。其さま宛として一幅のポンチ畫に似たり、傍人皆腹を抱へて笑ふ。笑へば笑ふほど彼は興に乘して踊狂ふ。彼は平然として社會の人を弄するもの、如し、彼も亦達人なる哉。それより昨夜の路を辿りつゝ多摩川の岸にいたりて渡しを呼ぶ。所謂多摩川の上流にして東京市民二百萬の飲用する分水地なり。堤防堅うして工事亦整ふと雖、一たび洪水の氾濫して押し寄せ來るに會せば、堤防爲めに決潰すると數々ありと云ふ。水の力亦偉なる哉。川を越へ數十步にして麓に達す。發起者の二青年路なき所に路を求め勇猛精進荊棘を排し蔦に攀ぢましらの如く進みゆくも、余と旭村兄は稍もすれば蹉き倒れんとす外套を托して僅に登るを得、心臟の鼓動漸くやみて先づうれしかりし。是でも富士登山せりなどと旭村兄語る、頗るあやしきものなりき。山は豆の如く小なりと雖も、遙に模糊たる筑波山を望むべく。近くは茫々たる武藏野の平原一眸の下にあり。飄々羽化して登仙するの思ひをなす。昨夜の聽衆のいたく滿足せる有樣など語り合ひ、峰より峰を步して南端に至りて盡くる所最も懸崖絕壁を極む。淸流麓をめぐりて琴線のしらべをなすに似たり。秋深うして草花枯れ果て獨り累々たる兎糞のみ目を惹くのみ。山を下て手に淸流を掬して冷かなる秋の水を賞す。渴する吾にはげに甘露の如し。時すでに午に近く忽遑として停車場の茶亭に歸り、共に畫餐を同うして再び好緣を約す。遠からずして求道會はこの山村水鄕の別天地に誕生せられんとす。因緣洵に不思議なりと云ふべし。主婦來りて瀛車將に發せんとするを告ぐ。乃ち袂を分ちて歸途に上る。目を閉づれば、山容水態、彷彿として笑て吾を送るもの、如し。

＊　＊　＊　＊　＊

匈牙利より

其後御無沙汰をしてゐました、去る八月の十日から北歐巡遊の途に登りて四月中スカンヂナヴ井ア並にフインランドをうろつき、四月末にペテルビルヒに着きました。かしこにては

貴兄に見せたい話したい樣なことを澤山見聞しました、まして モスカウにては一種異樣の感にうたれました、拙き筆のかき盡し得ることでもありませんから一つは申しませんが先づ其一端を申すと概して東洋趣味の大きに存せると、希臘敎が國家と組んで非常な壓力を人民の精神上に加へて居ると、西洋の文明が中流以上に彌蔓して妙な形を呈してゐると、軍事に關する諸般の設備が驚くべきほどめんみつになつてゐるとです、白鳥博士と同宿をしてゐましたがおちついてしらべるといふ樣ないとまはありませんでした、ことに物價が高直な爲に貧生の足を止むべきところでもないと感じましたから眞の見物だけでインスチチユート樣のものを見まはることはしませんでした、露西亞平原の廣漠なるに肝をうばはれワルシヤウの思つたよりうつくしきこと開化せることに驚き露墺澳理の國境に甚しきめんどうを感じてやつとの事で言葉の樂に通ずるブレスラウについたのが九月十二日風を引いてしばし養生してウ非ーンに入りかしこにて圖書館等委しく見てこゝにきました、この地も西歐とさらにかはつたことはありません、東洋語の學者共にあつて非常に愉快を感じましたドナウの流の廣大なることこれに架する鐵橋頗る宏壯なるには思ひがけなく思つたです、本月中はこゝに滯在して來月はボヘシヤに入りかしこのチェヒッシュの事をすこしきいて再びセキシッシュ、シワイツを過ぎ、ライプチヒに歸るつもりです尙くはしき旅行談は後に申しませう。

先般淸澤先生の吊の事についておたのみした事は已に御世話下さつたこと存じます。

小生が旅立をする比には我家に薗田君がゐられたです、氏も露國に行つたといふ事ですが今はもうベルリンに歸つて歸朝の支度中と察してゐます。

久しく日本の新聞等を見ませぬので更に樣子がわかりませんとにかく求道學舍は健全にして貴兄の事業も日を追つて成効に近くことゝ存じます。

こゝに諸兄の健康萬歲を祝します。

明治卅六年九月九日

匈牙利ブダペストにて

藤岡勝二

今日は小閑を得たり、平生とてさほどに多忙には非ず甚閑なり。されど今日は政敎時報の文苑を精讀する小閑を得たりと思ひ玉へ廉郷の

勤行の庵主が齋や冬近し

まて至りて大に其齋を思ひ出し候。其次の句に古障子とあるか破障子と改めば一層荒寥の感あらん。されど古くとも破れては居らぬなるべしと思ひて聊か安堵致候「本郷の氣候きゝたし破障子」「追々に入る縮む寒さ哉」、時下折角御自重被遊度第二求道學舍九段へ御新設何よりうれしう存候。

十二月一日

無窮堂主人

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ、一般に道義の制裁弛み去りて皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を攫まむとして胸中幾多の苦悶を抱き。社會實務の人にして、志操清淨なるものは、其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也

昨年已來、聊か此の時運の必要に應せむとする微志あり。先輩の企てられし跡を引き繼ぎて、一方には求道學舍を設け。此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め。また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潛めて信仰の問題を講し、互に心靈の修養に從ひしが。幸に佛陀の冥祐と、師友の同情とにより て其期する所空しからず。學舍は常に滿員にして幾多の申込に負き。假會場に充てたる居間は狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし。此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に從ひ、學舍を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す。幸に篤厚なる先輩の指導に從ひ、忠實なる親友の贊助を仰き、着實なる實行によりて漸次其結果を擧けむこと是實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく、其不便を感する事一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未た容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり、故に先づ現時の必要に應すべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進まむことを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛教者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初めとして、幾多の社會的施設を詳細に調査し來りて、此等の事業の我國佛教者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得は幸之に過くるなし。冀くば四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを謹で白す。

明治三十六年十月

贊助者

理學士　稲葉昌丸
理學士　池山榮吉
理學士　今川甚神
理學士　石川成章
理學士　板橋盛俊
理學士　今井喜八
理學士　北條時敬
理學士　西澤善七
文學士　本多辰次郎
文學士　朝永三十郎
文學士　常盤大定
文學士　大内青巒
文學士　大草慧實
文學士　小河滋次郎
文學士　萩野仲三郎
文學士　岡田治衛武

發起者

（いろは順）

文學士　和田鼎
醫學博士　片山國嘉
醫學博士　柏原文太郎
文學士　吉田賢龍
文學士　吉田靜致
文學博士　高山順次郎
文學博士　南月良雄
文學博士　村上了
文學博士　杉田覺
法學士　野上雄
侯爵　久我通久
文學博士　藤馬秀
文學博士　前田精文
文學博士　松本文三郎
文學博士　雲慧
文學士　眞岡湛海
文學士　丸井圭次郎
文學士　藤島了穩

近角常觀

文學士　藤井健治郎
文學博士　姉崎正治
文學博士　安達憲忠
文學士　秋野孝道
文學士　澤柳政太郎
文學士　齋藤唯信
文學士　佐竹觀海
文學士　酒生慧眼
文學士　境野哲
文學士　櫻井義肇
文學士　三好愛吉
文學博士　白鳥庫吉
文學博士　島地默雷
文學士　島田蕃根
文學士　新保德壽
文學士　杉村廣太郎

注意

一、喜捨金爲替振局は本郷森川町郵便貯金爲替取扱所宛若くは第一銀行宛御取組み奉願候
一、爲替受取人宛名は東京本郷區森川町一番地求道學舍近角常觀宛にて御送附奉願候
一、喜捨金御送附被下候節は直ちに發起人より受取差出し月々政教時報紙上に於て報告可仕候
一、喜捨金は直ちに第一銀行預け込み可申候

求道會館設立喜捨受領報告

一金三十圓　即納　大野直枝殿
一金十圓　即納　小野藤太殿
一金一圓　即納　上州井野定次郎殿
一金一圓　即納　尾張無名氏殿
一金一圓五十錢　即納　長野大日方大助殿
一金十圓　靜岡兒玉祖虔殿
一金十二圓二十五錢　早稲田大學敎友會募集

内譯

一金壹圓　早稲田大學生　田中龜之助殿
一金十錢　仝　牛膓鉄乘殿
一金十五錢　仝　美佐捨治殿
一金五十錢　仝　藤本慶祐殿
一金三十錢　仝　八杉良宗殿
一金十五錢　仝　梶原尤山殿
一金二十五錢　仝　田和巳之助殿
一金二十錢　仝　一色雄吉殿
一金十二錢　仝　平井峯一殿
一金十錢　仝　小澤順作殿
一金二十錢　仝　平山彌一殿
一金二十錢　仝　深川慈眼殿
一金十錢　仝　小出智恩殿
一金十錢　仝　石川慈惠殿
一金十錢　仝　横山嘉造殿
一金五十錢　仝　近藤惠殿
一金五十錢　仝　佐々木嶋殿
一金五十錢　仝　鹿藤英徹殿
一金二十錢　仝　吉嶋黑隆殿
一金二十錢　仝　鹿村法和殿
一金三十錢　仝　法嶋良吉郎殿
一金三十錢　仝　石倉法源治言殿
一金五十錢　仝　上木合治嚴殿
一金五十錢　仝　奈川芳笑蘇殿
一金五十錢　仝　渡邊惠準殿
一金三十錢　仝　樋口知龍明造殿
一金三十錢　仝　茂邊知空觀惠殿
一金三十錢　仝　內藤安清吾恩殿
一金三十錢　仝　保倉五諦緣眼殿
一金五十錢　仝　內木清空作殿
一金三十錢　仝　中山合吾一殿
一金三十錢　仝　小倉芳緣吉殿
一金五十錢　仝　宮木惠言雄殿
一金三十錢　仝　熊川法治助殿
一金三十錢　仝　朝嶋治殿
一金五十錢　仝　東條笑殿
一金三十錢　仝　岡倉惠殿
一金五十錢　仝　田木明殿
一金三十錢　仝　海山觀殿
一金五十錢　仝　耀倉惠殿
一金五十錢　仝　賢捨殿
一金三十錢　仝　夫源殿
一金五十錢　仝　友合殿
一金三十錢　仝　殿芳殿
一金五十錢　仝　殿惠殿
一金三十錢　仝　殿諦殿
一金五十錢　仝　殿清殿
一金三十錢　仝　殿龍殿
一金五十錢　仝　殿知殿
一金三十錢　仝　殿空殿
一金五十錢　仝　殿緣殿
一金三十錢　仝　殿吾殿
一金三十錢　仝　殿緣殿
一金三十錢　仝　殿吉殿
一金五十錢　仝　殿言殿
一金二十錢　仝　殿治殿
一金二十錢　仝　殿嚴殿
一金三十錢　仝　殿蘇殿
一金三十錢　仝　殿準殿
一金五十錢　仝　殿造殿
一金五十錢　仝　殿惠殿
一金十錢　仝　殿恩殿
一金十錢　仝　殿眼殿
一金二十錢　仝　殿作殿
一金二十錢　仝　殿一殿
一金十錢　仝　殿吉殿
一金十錢　仝　殿雄殿
一金十錢　仝　殿助殿
一金十錢　仝　殿山殿

小計　六十五圓七十五錢
通計　三百八十二圓二十五錢

右求道會館設立資金として御喜捨被成下茲に謹むで感謝し奉り候也

發起人　近角常觀

文學士　近角常觀先生

信仰問題

近刊

菊版二百頁以上
洋裝總クロース製本美麗
代價一册六拾錢郵稅拾錢

如何にして信仰を得可きかとは、現時青年の叫にして、如何なる信仰を以て社會を經營すべきかとは二十世紀の問題也、本書內篇は前の疑問に答へたるものにして、外篇は後の疑問に答へたるもの也。

內篇には內的實驗の主義に立ちて現時紛糾亂雜せる哲學、倫理等の關係に向て直截簡潔なる判斷を下し、宗教の眞髓を攫み來りて切實なる求道者に與へむとする者、其信仰の極所を叙するに至りて、慈光春風の世界に遊びて攝取の清懷に悟融するの想あらしむ。

外篇は社會の病源に向て根本的の救濟を施こし、理想の淨國を現世に實現せんとする者、歐米各國の宗教界及ひ社會事業を紹介し、飜て佛教原初の眞精神を說き、將來、清新にして且つ健全なる社會的經營を皷舞し來る、繙く者をして感激奮起せしむるものあり。

本書卷首に米國シカゴ青年會館、英國兩院及ウエストミンスター寺院、獨逸ルーテルの聖書飜譯室、佛國宗教歷史大會の寫眞石版圖を揭け、附錄として著者洋行中の通信及ひ旅行記を收む、趣味津々聊か諸者を慰むるに足らむか。

發行所　東京本郷四丁目　文明堂

○顯明院大谷勝珍師題辭○福順寺圓輪師述

二尊一致錄 上卷

文政弘化の交に於て學德兼備の譽高かりし香樹院德龍師の上足にして特に唱導の妙は和上をして歎稱せしめたる田井の福順寺 攝護庵圓輪師が善導大師の和讃に依て眞諦俗諦に互り父母孝養の道を說かれし書なれば僧侶は文を讀て 布敎 の好材料を得べく 在家の諸氏は以て 安心 を決定し 倫常 を守るを得べし今度本會其の稿本を得て印行したり苟も布敎に志ある諸師、修養に志ある信徒諸君若し一本を購ひ日夕誦讀あらば自利々他の答鮮からざるべし

○定價上下二卷金壹圓廿錢○郵稅金八錢○豫約價金壹圓(郵稅共)○上卷は既刊下卷は卅七年二月中發行○本年中に送金の分は豫約價にて取扱ふべし

東京府荏原郡品川町九十五番地

法話發行所

東京市芝區高輪佛敎大學學友會發行

研究
支那淨土敎系統論　妻木直良
輪廻論　東忍敬
德政考　酒生慧眼

詩林
ベル樹のしつく　默禪
如來投機益物の歌　紫雲
淸き一夜

高輪學報 第廿五號(毎月一日 十一月五日)發行

蒐錄
宗性上人と其著書　萩野仲三郎
王陽明先生の世德記　東敬治
宗敎々育に就て　振憂子

彙報
開校紀念式典—科外講義—高輪文學會—役員交迭—敎學事件—同窓動靜—寄贈

附錄
英文大無量壽經和譯　藤井芳信

定價 一部十錢 半ヶ年分五十五錢 一ヶ年分金壹圓 郵稅不要

無盡燈

十二月一日發行 第八卷 第十二號 一部十錢 一年一圓

▲研究▼
◎老子の哲學　安藤州一
◎大小乘涅槃經概論　長島徹映
◎訶梨跋摩論　佐々木月樵
◎數論の有我論　野田明薫
◎科學と宗敎との調和に就て(其四)　伊藤古川

▲修養▼
◎信仰は客觀的事實なり　今井昇道

▲雜纂▼
◎龍樹世親優劣の批判　舟橋水哉
◎北京版西藏語經典に就て　川上貞信
◎『敎行信證文類』と『法華經』　中川惠亮

▲時論▼
◎絕對的謙讓と他力信仰◎御同朋主義の復活◎活ける靈ありや◎傳道の秘妙◎所謂個人主義◎活殺の樞機◎學徒の本領◎二種の成功者◎精神主義者の所說と其歸結　◎新刊紹介◎近事會報◎『無盡灯』第八卷總目錄

▲附錄▼
○梵文法華經和譯　南條文雄
○西藏文法華經和譯　川上貞信

東京巢鴨眞宗大學

無盡燈社發行 電話番町五〇七番

淸澤奬學資金報告

明治三十六年十二月五日調

一金一圓　高橋久丸殿
一金五十錢　廣田智海殿
一金五圓　朝永三十郎殿
一金五圓　龍野元四殿
一金十五圓　齊藤唯信殿
一金二圓　松岡秀雄殿
一金十圓　井上豐忠殿
一金五圓　華房晉因殿
一金三圓　田中善立殿
一金五圓　井上圓了殿
一金二圓　横山晉殿
一金五圓　鳳氣至洪雄殿
一金五圓　南浮智成殿
一金十圓　佳田智見殿
一金十圓　河野法雲殿
一金十圓　楠秀丸殿
一金一圓　山田眞之助殿
一金三圓　小田切良太郎殿
一金一圓　吉田廣海殿
一金三圓　西依一六殿
一金五十錢　丑G丁殿
一金一圓　兒玉祖虔殿
一金一圓　井野定次郎殿
一金一圓　大日方大助殿
一金二圓　呼野諫殿
一金二圓　野々山照界殿
一金五圓　福來友吉殿
一金三圓　大谷正信殿
一金一圓　柴田佐治右衛門殿
一金十圓　淸川圓誠殿
一金五圓　出原義曉殿
一金二十圓　大草慧實殿
一金一圓　加藤玄智殿
一金一圓　背柳廣雲殿
一金一圓　本多八重丸殿
一金一圓　淺野法顯殿
一金三圓　吉田靜致殿
一金八圓　石井生馬殿
一金十圓　上杉文秀殿
一金五圓　人見忠二郎殿
一金一圓　富田泰吉殿
一金二十圓　和田圓什殿　和田鼎殿
一金五圓　金義鑑殿
一金三圓　松本源太郎殿
一金五圓　有馬祐政殿
一金三圓　千野哲次殿
一金一圓　緒方活龍殿

右小計　金二百二十一圓也

通計　金五百六十五圓二十錢也

海老名彈正先生著

基督の大訓註釋

（最新版本月本日發行）

▲洋製菊版特上クロース製
▲正價金六十錢　郵稅十錢
△郵劵代用一割增ノコト

基督教に關する書類は坊間其數に乏しからずといへども近代の研究と深邃なる實驗とに基きて成れる註釋書としては一として見るべきものなし。

斯教の大家海老名彈正先生茲に見る處あり新約聖書中の骨子たる山上の垂訓を註釋し加ふるに論評を以てす眞に是れ未曾有の高著にして江湖の要求亦始めて本書によりて滿たさるゝを得べきなり競ふて愛讀を祈る

佐々木月樵先生新著

●實驗之宗教（好評再版出來）

▲洋裝クロース美麗
▲菊版三百三十頁餘
▲實價六十錢稅十錢

翠村　濱口惠璋先生新著

實驗之宗教

▲洋裝クロース製美本
▲本月本日發行
▲實價金四十錢稅六錢

宗教を知らんと欲ずるの青年は本書を讀め、本書は卿等の爲めに幾多の疑團を氷釋せしめんとしつゝあり、宗教は必要なりや否やを初歩として宗教の撰擇、靈魂說の解答、佛陀と吾人との關係より他力義に對する解答に至るまで細大洩らさず淳々倦ます師友となりて宗教の眞意義を說明せり』

發行元　東京本郷四丁目五番地　文明堂

文學士　清澤滿之序
文學士　近角常觀著

信仰之餘瀝

全

上製二十五錢　並製十五錢　郵稅二錢

今般第四版發行致候。上製は總クロースにて。頗る美麗なる册子に製本仕候。携帶に至極便利に相成候間續々御愛讀希上候

本郷森川町一、
發行所　大日本佛教徒同盟會

文學士　近角常觀著

佛弟子小傳

近刊

發行所　本郷四丁目　文明堂

規定

一、本誌は毎月一回（八日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
　但郵劵代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	無遞送料

◉廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

明治三十六年十二月七日印刷
明治三十六年十二月八日發行

發行兼編輯人　百目木智璉
印刷人　白土幸力
東京市本郷森川町一番地
發行所　大日本佛教徒同盟會出版部
（電話下谷二四三二）

大賣捌所　東京市神田神保町　東京堂
同　本郷四丁目　文明堂

前號要目

宗教的經營及社會事業を論ず　近角學士

新論を讀む　有馬學士

元照律師の西方願生　齋藤唯信

錫蘭佛跡　松本博士

政教時報第百七號　明治三十一年十二月廿六日遞信省第三種郵便物認可

明治三十六年十二月八日發行　（毎月一回八日發行）

（東京市神田區美土代町二丁目三光堂製版印刷）